

ヒトラーを画家に

する話

高羽
彩

【登場人物】

齋藤僚太……芸大油画科の四年生。実家は有名な画廊を経営している。

朝利悠人……芸大油画科の四年生。在学中からプロダクトデザイナーとして活動。

板垣健介……芸大油画科の四年生。教職取得。教員採用試験を控えている。

アドルフ・ヒトラー……一九歳。愛称ドルフィ。画家を目指してウィーン美術アカデミ

ー浪人中。

アウグスト・クビツェク……二〇歳。愛称グストル。アドルフのリンツ時代からの親

友。ウィーン音楽学校でピアノを学んでいる。アドルフとは同室。

アロン・クラウス……一九歳。ウィーン美術アカデミー受験の為に上京。ポーランド系の裕福なユダヤ人。

マリア・ツァクライス……五〇代。下宿の女主人。夫はすでに他界。

エルマー・ツァクライス……三〇代。マリアの義理の弟。求職中。

シュテファニー・ツァクライス……一八才。マリアの娘。家事手伝い。愛称シュテフィー。

ワシリー・シュナイダー……六〇代。ウィーン美術アカデミーの教授。

アロイス・ヒトラー……アドルフの父。5年前に他界。

鷺塚朱音……三〇代。芸大油画科の教授。

藍島稔梨……二〇代。芸大卒のモダンアーティスト。

齋藤富貴子……僚太の母。

齋藤東吾……僚太の父。有名な画商・キュレーター。

【舞台】

美術館のような白壁のガランとした空間。

壁にはいくつかの穴が空いており、それは窓のようにも、絵画を飾る額のようにも見える。壁の向こう、舞台後方には高台があり、そこから舞台全体を見下ろすことができる。

ここは、現代の美術大学油画科鷲塚ゼミのアトリエであり、一九〇八年のウィーンの街であり、ツアクライス夫人の下宿の玄関ホールであり、その他様々な場所へと物語の進行に合わせて変化する。

白壁の中央には、舞台奥に抜ける通路。

下手には、くの字に蛇行した階段。階段の先は舞台の2階部分に通じている。階段の踊り場から下手への出ハケ口がある。

その他、下手手前、上手手前、上手奥にも出ハケ口がある。

第1幕

○オープニング

薄暗い空間。

大小様々な額縁を持った人々がゆったりと動き群像を成している。人々、自分の姿を額縁の中に収める。

群像の中、ただ一人、額縁を持たない青年が浮かび上がる。

群像「アドルフ！」

それは、まだ何者でもない青年。

群像「アドルフ・ヒトラー！」

と、天から一冊のスケッチブックが落ちてくる。

青年、ハッと振り返る。

暗転。

○1、鷺塚ゼミアトリエ

現代。7月24日の昼下がり。

そこは鷺塚ゼミアトリエ。

ソファアーにだらしなく座りスケッチブックを見ている僚太。

その側に立つ藍島。

藍島の足元には彼女の絵画作品が積み上げられている。

ソファアー周辺は学生たちのたまり場になっているようだ。

下手の階段の先、アトリエの2階は鷺塚教授の研究室に繋がっている。

藍島は、僚太に自分の作品を見せている。

僚太「……あり」

藍島、僚太に評価されるたび、作品を取り替える。

僚太「……あり」

鷺塚「(2階をうろつきながらひとりごち)アレ〜? おかしいな……」

僚太「……あり。だけど二つ前の奴よりは劣るかな」

鷲塚「もうちょっとでうまく行くはずなんだけどなあ」

藍島「せんせーなにしてんの？」

僚太「……なし」

藍島「え〜〜〜」

僚太「なしなし」

藍島「頑張ったんだよろ？　こことか、このポリエステルのコラーージュのとことかさあ」

僚太「(スケッチブックを床に置いて)先輩それ、春の個展に出してた『永遠2(作品タイトルである)』の焼き直しでしょ」

藍島「バレた？」

僚太「わかるよそのくらい」

鷲塚、二階の研究室から出てきて、

鷲塚「藍島あ。あんた卒業してんだからいい加減大学に自分の作品おいとくのやめな。…

…なにしてんの」

藍島「今日このあと僚太のお父さんに会うことになってて」

鷲塚「ああ、斎藤さん？」

藍島「どの作品買ってもらおうかな〜って。選んでもらってるの」

鷲塚「なんで僚太に？」

藍島「見る目あるから」

鷲塚「あ〜。お父さん、また新しいギャラリーオープンするんだっけ？」

藍島「しかも六本木だよ〜？」

鷲塚「儲かってんねえ！　あたしの作品も買ってくれないかな」

藍島「箔つくもんね」

僚太「先生のはとがりすぎてて商品にならないっす」

鷲塚「なるふおど」

僚太「ふおどってなに」

藍島「今は何にハマってるの？」

鷲塚「量子物理学による世界認知の再構築とその芸術的応用？」

僚太「いみわかんねー」

藍島「さあ、僚太君！　お父さんの好みを教えなさい！」

僚太「そんなの知らないよ」

藍島「じゃああなたの好みでいいから。どれがいちばん好き？　どれが一番高く売れると思

う？」

僚太「えー……」

僚太、藍島の作品をガサゴソ探り、

僚太「……これ」

鷺塚「おー、確かにいい」

藍島「ねえ！ これ、最近描いた中で一番のお気に入りなんだけど！ どうしてわかるの?!」

僚太「べつになんとなく」

鷺塚「今でこそそこそこ売れてる藍島だけどさ」

藍島「そこそこって。美術手帖で特集組まれてますけどー?」

鷺塚「最初に藍島の作品がいいって言い出したの僚太だったよね。そう言うのってどう見極めてるわけ?」

僚太「……なんか、光って見える。っていうか」

藍島「はあ」

僚太「いやこれは藍島先輩の作品だけじゃなくて。俺がいいなって思う作品は、光ってるんだよ。たくさん並んでる作品の中でそれだけが特別に。それで思わず足を止めたくなる。足を止めると、猛烈な引力で引き寄せられて次の瞬間には、世界に俺とその作品しかなくなってる。この作品の力で、世界の形や時間の流れさえ変わってしまうんじゃないかって予感にも出来なくなる……」

藍島「さすが斎藤ギャラリーの御曹司。審美眼も遺伝するのかねえ?」

僚太「べつに普通だよ」

鷺塚「自信もちな。印象派を世に知らしめたポール・デュランⅡデュエルしかり、ピカソを見いだしたダニエルⅡヘンリー・カーンワイラーしかり、偉大な芸術を支えるのはいつだって、あんたみたいな見る目のある人間なんだから」

僚太「うん……」

鷺塚「さ、ウザい先輩の相手はそのくらいにして」

藍島「ウザくないよねえ?」

鷺塚「卒制なんとかしな。まだ制作計画も出してないんだから」

藍島「えー！ 卒制のエスキースまだ出してないのー? もう7月だよやばくない?」

鷺塚「あんまり茶化さない」

藍島「ワッシーは今なに作ってるのー?」

鷺塚「タイムマシン」

藍島「え、やばー(笑)」

鷺塚、再び二階にもどる。

と、朝利と板垣やってくる。

朝利「おつかれーす。なんか学食がリニューアルオープンするらしいわ(僚太にチラシを渡す)」

僚太「へー。山菜そば無くならないならなんでも良いわ(適当に見たあとにポケットへ)」
板垣「あっ！ 藍ちゃん先輩！ いらしてたんですね！ こないだの個展見に行きまし

た！ 『永遠2』 超よかったです！！』

藍島「(鷺塚に) ほらーうざくないじゃん」

朝利「少しはアイデア出た？」

僚太「……」

板垣「(藍島に) いまから卒制のテーマ決めつきあうことになってて」

藍島「いいなあ。そういう学生の友情。まぶしいなあ」

朝利「先輩友達いないっすもんね」

藍島「才能って人を孤独にするのよ」

朝利「(大げさなため息) はあーあ」

藍島「ちょっと聞いている?!」

板垣「つかれてるね」

朝利「クラファンで作ってるプロダクトのアライアンスオーナーミーティングにアジェンダコミットしててさ、タスクオーバー気味なんだよね。もうちょっと俺のバッファを検討してフロー組んで欲しいよなあ」

板垣「……かっけえー」

藍島「デザイン科の子たちと起業したんだっけ？」

朝利「(舌をカコツと鳴らして答える)」

藍島「板垣くんは？ 教職取れそう？」

板垣「こないだ教育実習も無事終わったんで。後は地元の教員採用試験に合格すれば晴れて！」

朝利「コイツ(僚太) だけです。なにも決まってないの」

板垣「そりゃ卒制にも身がはいらんよねえ」

藍島「え？ 僚太はギャラリー継ぐんでしょ？」

板垣「(気まずい空気を察して) あ」

藍島「え？」

板垣「今その話題ちょっとセンシティブって言うか」

僚太「……」

朝利「べつにそんな悩むようなことじゃないと思うけどね」

と、僚太の携帯のバイブ音が鳴り始める。

バイブ音、ワンワンと僚太の頭の中で響く。

板垣「あ、ちょっとねえ。携帯鳴ってるよ」

朝利「お前は描く側の人間なんだからさ」

板垣「(僚太に携帯見せてやり) ほら、お父さんから」

携帯鳴り響く中、二階から僚太の父、斎藤東吾と母、富貴子の姿が現れる。

二人は写真館でとる家族写真のように律儀に並んでいる。

東吾「お前は確かに絵がうまい」

富貴子「そうよね〜」

東吾「それで？ だからなんだ」

富貴子「それはそうよね〜」

僚太「……」

東吾「本物の才能には世界を変える力がある」

富貴子「そうよ〜」

東吾「歴史に名を刻み、必ず自ずから発見される」

富貴子「そういうものなのよ〜」

東吾「お前に本物の才能があるなら、すでに発見されてるはずだ」

富貴子「そうよね〜」

僚太「……」

東吾「本当はお前にもわかっているだろ。自分の居場所がどこにあるのか。そのために幼い

頃から世界中のありとあらゆる名画を見せてきたんだから」

富貴子「僚ちゃん。パパの言うとおり、画家になるのは諦めてうちのギャラリーを継ぎな

いな」

東吾「どうしても画家になりたいというなら、俺が納得する作品を描いて見せろ。凡庸な作

品じゃない。世界を変える作品を」

僚太「……」

再びバイブ音が高鳴る中、両親は去る。

と、二階でボンと煙が上がり、バイブ音は消える。

鷺塚「成功だー！ー！ー！ー！」

鷺塚、タイムマシン（OHPのような形状をしたもの）を抱えて飛び出してくる。

藍島「びっくりしたあ！」

板垣「あ、電話切れちゃったよ（とその辺に携帯を置く）」

鷺塚「ついに、物質の時空間転移に成功した！」

藍島「はあ？」

鷺塚「これぞ即時性が評価される現代における作品と時間経過、歴史的社会的なアート解釈

の再構築のためのコペルニクスの転換！」

朝利「（鷺塚の台詞にかぶって）またやってるよ」

板垣「で、どうする？ 美術館行く？ それとも映画とか」

朝利「とりあえず今出てるアイデア見せてよ」

僚太「そのスケッチブックにさ……」

朝利「どこ？」

僚太「あれ？」

藍島「(驚塚に)なに言ってるの？」

驚塚「タイムスリップに成功したんだよ！」

僚太「この辺においといたんだけどな」

板垣「スケブ？ ないの？」

僚太、朝利、板垣、あたりをキョロキョロと探し始める。

藍島「いやワッシーまじウケんだけど」

板垣「藍ちゃん先輩、この辺で僚太のスケッチブック見ませんでした？」

驚塚「本当なんだって！ まじで、ここにあったスケッチブックが、あたしの目の前できえ
たんだから！！」

僚太たち、はたと動きを止める。

僚太「ん？」

驚塚「は？」

僚太「今スケッチブックって言った？」

驚塚「言ったが？」

僚太「どこにあった、それ」

驚塚「ここだが？」

僚太「どうした？」

驚塚「消えた」

僚太「それ俺のスケッチブック！！ エスキース用の！！」

驚塚「あそうなの？」

僚太「おい！」

板垣「え、どういうこと？」

僚太「どこやったんだよ！」

驚塚「あ、えーとね、一九〇八年のウィーン」

藍島「なんで！」

驚塚「その辺の絵画が好きだから？」

板垣「え、どういうこと？」

驚塚「最新の現代アートを作るでしょ？ で、それを百年前に送って、現代で回収するじゃん？ そうすると、ついさっき作った現代アートがすでに百年前の古典作品になってるわけよ。つまりこれで作品の新規性っていうのはなにに依存してるのかっていう問題提起をはらんだ作品が量産できるのね？」

僚太、アトリエ中を探しながら、

僚太「そういうのいいから、どこやったんだって！」

朝利「へー、おもしろいっすね」

僚太「ちょっと、二人も捜してって」

朝利「そういう設定のインスタレーションってことですよ？　どういう仕掛けで消すんですか？」

鷺塚「いや設定とかじゃなくて、ほんとにタイムスリップしたんだって」

藍島（僚太に）「あ、ダメだ。先生このモードに入ったら絶対作品の設定曲げないから」

僚太「も〜〜〜」

板垣「え？　僚太のエスキースは今、一九〇八年のウィーンにあるって事？」

僚太「先生が早くエスキース出せって言ったんじゃない！」

鷺塚「あのね、歴史的革命的な作品誕生の瞬間なの。あんたのエスキースなんてどうでもいいわ」

朝利「仮にタイムスリップだとして、過去に送った作品をどうやって現在で回収するんですか？」

鷺塚「あ。それ考えてなかったわ」

僚太「ふざけんなよ！」

僚太、鷺塚からタイムマシンを奪い取って床にたたきつける。

○2. タイムスリップ

瞬間閃光とともに煙が発生、世界がグルグルと回転し始める。
ばかばかしく陽気な音楽が流れ始め、鷺塚と藍島がウキウキと踊り始める。

僚太「は？」

板垣「え、なに？」

回転する世界に巻き込まれていく鷺塚と藍島。

富貴子がボデイコンの格好で、ディスコダンスをしながら出てくる。

僚太「母さん！！」

東吾もタケノコ族の格好をして、ステップダンスをしながら出てくる。

僚太「オヤジ?!」

板垣「お父さん?!」

僚太「なにそのかっこ！ おやじーーーーー！！」

つづいて、各時代を象徴する装束を身につけた人間が、やはりその時代を象徴する踊りをしながら出てくる。

軍人風の男。

朝利「だれだよ！」

もう一人、20世紀初頭のヨーロッパの男性が出てくる。

朝利「だから誰なんだよ！」

鷺塚、藍島、富貴子、東吾、そして知らない人たち、僚太たちの周りを踊りながら去っていく。

僚太、朝利、板垣、時空の渦に巻きこまれ前方に向かって跳び出す。

と、周囲には一九〇八年ウィーンに暮らす人々の姿がある。

○3. ウィーンの中心街

そこは、一九〇八年七月二四日のウィーン。文化の爛熟期であり、ヨーロッパ社会の中心地であったウィーンは喧噪で満ちている。

人々が行き交う中、呆然と立ち尽くす3人。

僚太「……え？」

ウィーン市民「危ない！」

馬のいななきとともに馬車が駆け抜ける音が通り過ぎる。大きく避ける3人。

僚太・朝利・板垣「（顔を見合わせ）馬車だあ……」

朝利「マジでタイムスリップしたって事？」

板垣「あれ？ いま言葉わかったよね？」

と、人々の中、スケッチブックを持ったアドルフが通り過ぎる。

僚太「あれ俺のスケッチブックだ……」

朝利「あ？」

僚太「あの、すいませーん！」

アドルフは気付かず、舞台二階部分へと去って行く。それを追いかける僚太。

朝利「おい待ってって！」

板垣「勝手に動いていいの？ ねえ！」

朝利と板垣も僚太を追って去る。

再び時空の渦。

そこは鷺塚ゼミのアトリエになる。

○4・鷺塚ゼミアトリエ

呆然としている鷺塚と藍島。

藍島「マジで消えた……」

鷺塚「あたしの……あたしの作品があゝ」

藍島「おい。おい」

鷺塚「一生懸命作ったのにいゝ」

藍島「あなたの生徒、いなくなっただけだ」

鷺塚「あ……？」

藍島「ほれ」

しばしの沈黙のあと、二人、歓声を上げてキャッキヤと飛び跳ねる。

藍島「えー！ すごい！ すごくない?!」

鷺塚「だから言ったじゃーん！ タイムスリップに成功したって！」

藍島「先生てんさーい！ ワッシー天才児〜！」

鷺塚「……」

藍島「……」

鷺塚「やべえ」

藍島「え、どうする？」

鷺塚「ととととりあえずこれを直してだねえ……」

藍島「直したら呼び戻せるの？」

鷺塚「たたたたぶん。全身がスパゲッティ状に裂けて戻ってくる可能性もあるけどねえ……」

藍島「ひいっ」

と、東吾がキョロキョロしながらやってくる。

鷺塚「やばい……自分の成し遂げたことのすさまじさに震えが止まらん……やっぱりあ
しって天才だったんだ！」

藍島「自画自賛してる場合じゃないから！ 今はあの子たちを呼び戻すことだけ考えて
よー！」

鷺塚「う、うん」

東吾「どうも」

鷺塚、藍島死ぬ程驚いて、

東吾「僚太がいつもお世話になっております」

藍島「僚太君のお父様……!!」

東吾「ああ、藍島先生いらしてたんですね。そちらが新作ですか」

藍島「あれっ?! 今日がギャラリーでってお約束だったかと?!?!」

東吾「(作品を物色しながら) いやまあそうなんですけどね……ちよつと僚太を探しに。見ませんでしたか?」

藍島「あ、さっきまでそこにいたんですけど……。今ちよつといないといえますか」

鷺塚「今『に』居ないと言いますか……」

東吾「はい?」

藍島「いえあのなにか僚太君にご用事でしたか?」

東吾「ほら、今夜は六本木ギャラリーのオープニングレセプションじゃないですか。そこであれを後継者としてお披露目する予定でしたね。逃げられたら厄介ですんで捕まえに来たんですよ」

藍島、鷺塚これは不味いという顔。

東吾、作品の中から僚太が選んだものと同じものを選び出す。

東吾「これはいい。あとでスタッフに取りに来させます」

藍島「(深々と)ありがとうございます」

東吾「連れてきてください」

藍島「へ」

東吾「僚太。一九時に六本木のギャラリーに」

藍島「は、はい……」

東吾「遅れないでくださいね」

藍島「どうも~~~~」

藍島、鷺塚、笑顔で東吾を見送ると青ざめて、

藍島「早くそれ直して!!」

鷺塚「うん、うん。ちよ、ちよつと携帯かけてみて。早く帰って来てって言ったら帰ってくるかも」

藍島「一九〇八年に電話通じるわけ?」

鷺塚「ダメ元でも何でもいいからほら早く」

藍島「ああもう」

藍島、携帯をかけ始める。

鷺塚は、おろおろとタイムマシンを直し始める。

ソファーに残された携帯のバイブ音が鳴る。

藍島「携帯おいてってる!!！」

再び時空の渦。

素早くウィーンの町角に転換。

○5. ウィーンの町角

アドルフ、街頭にイーゼルを立てて風景画を描いている。

足元には僚太のスケッチブックが置かれている。

僚太、朝利、板垣がアドルフを追ってやってくる。

板垣「ねえ、戻らなくていいの？」

僚太「スケッチブック取り返さなきゃ。俺マジで卒制間に合わないって。(アドルフに気づき) あっ！」

板垣「ちよっと！」

僚太、おずおずとアドルフに近づく。

僚太を見守る、朝利と板垣。

僚太「あのーすいません」

板垣「そもそも言葉通じるわけ？」

朝利「しい！」

アドルフ「……………」

板垣「やっぱ通じてないって」

僚太「あの、ちよっといいですか」

アドルフ「……………みてわかんない？ 俺今、美術アカデミーの受験準備で忙しいんだけど」

板垣「通じた！ 向こうの言ってることもわかる！ そんでメチャメチャ感じ悪い！」

朝利「なるほどアグリー。そういうことね」

板垣「は？」

朝利「このタイムスリップは目的論的世界解釈による解析力学に基づいた同時的認識様式のタイムスリップなんだ。アグリーアグリー」

板垣「……………かっけえー。でもなに言ってるかわかんねえー」

朝利「認識の力が大きく作用する世界ってこと」

板垣「わかんねえー」

僚太「……………あのさ、間違ってたらごめんなんだけど、そのスケッチブックたぶん俺のだよね」

アドルフ「……………俺のだけど？」

僚太「いや、いやいや、ちよっと確認させてもらっていい？ 俺のだから」

僚太、スケッチブックに手を伸ばすが、アドルフがさっと手に取ってしまう。

アドルフ「いや、俺のだから」

僚太「違うよね！ その表紙の角の折れた感じ、絶対俺のだから」

アドルフ、折れをしれっと直し、

アドルフ「折れ？ どこに？」

僚太「今直したよね！ 直したよね！」

アドルフ「変な言いがかりはよしてくれないか！」

朝利、板垣、割って入り、

朝利「まあまあまあまあ」

アドルフ「なんだお前たちは！ 東洋人の物乞いか？ 汚らわしい！」

朝利「あ。かつちーん（メンチ切り始める）」

板垣「参戦するなよ」

僚太「物乞いはお前だろ？ 落ちてるもん猫ばばしやがって」

アドルフ「無礼なことをいうな！ 証拠はあるのか？ え？ こんな白紙のスケッチブックが、君のものだって証明できるって言うのか！」

板垣「白紙?!」

アドルフ、勝ち誇ったようにスケッチブックをパラパラとめくってみせる。

板垣「ほんとだ白紙だ」

僚太「……………」

朝利「僚太お前マジでなんも描けてないの？」

僚太「うるさい！ 白紙だろうがなんだろうが、それは俺のスケッチブックなの!!」

アウグスト「ドルフィン！」

舞台奥からアウグストが一目散に駆け寄ってくる。

アウグスト「なにやってるんだよ！ はやく行かないと、タンホイザーの立ち見席取れないよ?」

アドルフ「あ、でも」

アウグスト「荷物が気になるの？」

アウグスト、手早くアドルフの絵描き道具をまとめて、僚太に渡す。

アドルフ「あ、ちょっと」

アウグスト「ごめん君たち、この荷物、シュトゥンパー通り29番地のツァクライス夫人に

届けてもらっていいかな！ このくらいしか渡せないけど（小銭を渡す）」

僚太「よっしゃスケッチブック」

アドルフ「おい！」

アウグスト「急がないと、もう行列が劇場の角まで来てた！ 君が心待ちにしてた公演だろ」

アウグスト、さっさとアドルフを引っ張っていく。

アウグスト「僕はアウグスト・クビツェク！ 夫人にそう伝えてくれればいいから！」
アドルフ「必ず全部夫人に渡すんだぞ！ 俺はアドルフ・ヒトラーだ！」

アウグストに引っ張られながら去って行くアドルフ。

呆然と立ち尽くす3人。

僚太「……アドルフ・ヒトラーっていった？」

板垣「うん……」

僚太「アドルフ・ヒトラーってあのヒトラー？」

板垣「わかんないけど……」

僚太「ナチスの？ 独裁者で、あの一ユダヤ人を……大量虐殺した？」

板垣「でもなんか若かったよね？ ちょびひげも生えてないしさ」

朝利「一九〇八年だからだろ」

僚太「一九〇八年っていつ」

朝利「一九〇八年」

僚太「そうじゃなくて」

朝利「あーえっとー、第二次世界大戦が終わったのがー……おい、教職教職」

板垣「えっとー一九四五年！」

僚太「じゃああのくらいの年齢であってるのか……」

板垣「でも絵描いてたよ？」

朝利「ヒトラーって若い頃は画家を目指してたって聞いたことある」

僚太「そういえば、美術アカデミー受験がどうとかって……」

3人、思わずギョッとアドルフの荷物から身をひく。

僚太「うわあ〜本物だ〜本物のヒトラーに会っちゃったよ〜」

板垣「やべえ〜こええ〜」

朝利「ドラえもんのび太とパラレル西遊記みてえ〜！」

板垣「(朝利の言ってることがよくわからず)ん？」

朝利「(恥ずかしいのでごまかして)とにかく。これでスケッチブックも取り戻せた。帰るか」

朝利、僚太から荷物を受け取り地面に置く。

板垣「あれ？ 荷物は？ 下宿に届けなくていいの？」

朝利「いいだろ。ヒトラーの荷物だぞ？」

板垣「ああ……まあ、そうか……」

僚太「……」

僚太、何かが気になり荷物を見つめている。

板垣「え、でもどうやって帰るの？」

朝利「（ハタと）ああ……」

僚太「なあ、これさ」

朝利・板垣「ん？」

僚太「いま、俺たちがここにヒトラーの画材を置き去りにしたらどうなる？」

朝利「知らね。置き引きにあうとか？」

僚太「そのせいであいつが美術アカデミーを受験できなくなったりしたら？」

朝利「ああ？」

僚太「画家になれなかったあいつは、独裁者になってユダヤ人を大量虐殺する？」

朝利・板垣「……」

僚太「俺たちのせい？」

ふっと3人の緊張感が高まる。

と、携帯のバイブ音が鳴る。

3人、パタパタとポケットを探り、

朝利「つあ〜！ 携帯おいてきた〜！」

僚太「俺もだ〜！」

板垣「あ俺だ！ てか携帯通じるんだ！ 電波も4本立ってる〜！」

僚太・朝利「おおお」

板垣「はいもしもし」

板垣、スピーカーホンにして携帯に出る。

僚太、朝利、周りの目を気にして、携帯を隠すように板垣を取り囲む。

舞台上手、白壁の小窓に、藍島と鷺塚が現れる。

藍島「あ〜！ よかった〜！ 板垣くん携帯持ってた〜！」

板垣「藍ちゃん先輩！ 俺たちどうすればいいですか？」

藍島「今って、一九〇八年のウィーンにいる？」

板垣「あ、います〜」

鷲塚「おお〜」

朝利「おお、じゃねえだろ。迷惑なもん作りやがって」

藍島「いまね、鷲塚先生に大急ぎでタイムマシン直してもらってるから、それが直り次第、3人をこっちに戻すことが出来ると思うの」

板垣「ああ、まじすか！ よかった〜」

鷲塚「ちなみにそっちって今何時？」

板垣「あ、5時ですね。5時19分」

鷲塚「ん？（首をひねる）」

朝利「え？ もうそんな時間？」

藍島「とにかく急いで直すから、元いた位置で待ってて」

板垣「はい！」

藍島「僚太ー？ いるー？」

僚太「なに」

藍島「あんた今日お父さんと約束してたでしょ？ こっち戻ってきたら、速攻で六本木つれてくからね。時間に遅れても私のせいじゃないってちゃんとお父さんに説明してよね」

僚太「……」

藍島「ちよつとー？ 聞いているー？」

板垣「僚太？」

僚太「いや……俺、まだ帰らない」

藍島「はあ？」

携帯音声にノイズが走る。

板垣「なに言ってるの？」

僚太「卒制のテーマ決めたわ」

藍島「ちよつとよく聞こえないんだけど！」

僚太「ヒトラーを、画家にする！」

僚太、板垣から携帯を奪い取って切ってしまう。

同時に鷲塚、藍島の姿も消える。

板垣「なにやってんの?!」

板垣、慌てて電話をかけ直すが繋がらない。

板垣「話し中だ……どうしよう、こっちはかけられないのかな?!」

僚太「俺たちがヒトラーを画家にできれば、あいつは独裁者にならないし、ユダヤ人も殺されない！ 戦争も起きないかも！」

朝利「僚太？」

僚太「俺たちが世界を変えるんだよ！ 世界を変えた男の作品は……世界を変える作品だよなあ！」

板垣「なに言ってるの？」

朝利「……なるほど、アグリー」

板垣「朝利？」

朝利「今この時代で俺たちが、ヒトラーを画家にする」

朝利のセリフにあわせて可愛らしいイラストの説明映像が流れる。

朝利「そうすると、歴史がなんかイイ感じに変わる。で、僚太は、俺たちがヒトラーを画家にしたっていう証拠になるような作品をこの時代に残していく。例えばそのスケッチブックとか」

僚太「おお！」

朝利「で、平和な未来へバック・トゥ・ザ・フューチャーするわけだよ。で、スケッチブックを回収すれば、それは世界を変えた偉大な作品になる。ってことだよな？」

映像終わり。

僚太「あ、なんかそこまでちゃんと考えてなかったけどたぶんそういうこと」

朝利「それ面白いよ、僚太！」

僚太「だよな！ だよな！」

板垣「いやいやいやいや、待って待って」

僚太「なに？」

板垣「……帰ろうよ！ 俺もうすぐ教員採用試験なんだけど！」

朝利「タイムマシンがあるんだぞ？ 採用試験の前の時間に帰ればいいじゃん」

板垣「それもそっか……？ いやいやでも、どうやってヒトラーを画家にするの？」

僚太「あいつを美術アカデミーに合格させるんだよ」

板垣「へ？」

僚太「俺たちは20倍の倍率を勝ち抜いた、いわば受験美術のエリートだぞ？ ヒトラー1

人合格させるぐらいじゃないって」

朝利「確かに！」

板垣「そうかな？！ それに歴史が変わったら俺たち生まれてこないんじゃないの？ き、消えちゃったりしないかな！」

朝利「大丈夫だろ」

板垣「なんで？」

朝利「今、俺たちここにいるし。生まれてこなきゃ、そもそもここにいないし」

板垣「頭がこんがらがってきた……」

朝利「いいじゃん。俺たちそもそも僚太の卒制手伝うつもりだったんだからさ。僚太が納得するまでつきあおう」

板垣「えー」

朝利「学生最後の夏なんだからさあ！ 3人で歴史にフルコミットしようぜ！」

僚太「アグリー！」

板垣「ん？ てか、そのスケッチブック、どうやって未来で回収するの？」

朝利「時間指定郵便で送るんだよ。バック・トゥ・ザ・フューチャー2みたいに」

板垣「バック・トゥ・ザ・フューチャーの知識に頼りすぎじゃない？」

僚太「あれ？ 俺ヒトラーと喋ってた？ え？ 日本語で？」

板垣「そのくだりもうやったよ」

僚太「あそうなの？」

朝利『『シンドラーのリスト』も『ジョジョ・ラビット』も全編英語だろ？ そういうことだよ』

僚太「(わかってないけど)……なるほど」

3人、ヒトラーの荷物を抱えて去る。

転換すると、そこはツアクライス夫人の下宿。

階段の踊り場から下手側は玄関に繋がっている。

二階はアドルフたちが暮らす部屋。上手は炊事場やマリアたちの生活空間に繋が
り、舞台中央奥はエルマーの部屋に繋がっている。

エルマーがホールに置かれたベンチで酒を飲みながらだらけけている。

シュテファニーが、中央奥から一生懸命荷物を運び出している。

シュテファニー「おじさん！ ちょっとぐらい手伝ってよ！」

エルマー「やだあ〜」

シュテファニー「おかあさ〜ん！ おじさんが全然働かない〜」

マリア、奥から箒を持って出てくる。

マリア「エルマー。少しは手伝って。自分の荷物でしょ？」

エルマー「やだね〜。なにが悲しゅうて、自分が部屋から追い出される手伝いをせにゃなら
んのだ」

マリア「しょうがないじゃない。新しい店子さんが来るんだよ」

シュテファニー「しかもかなりいいところのお坊ちゃんのこと！」

エルマー「なにがいいところの坊ちゃんだよ。ユダヤ人だろ？」

シュテファニー「だったらなによ。貧乏なオーストリア人よりよっぽどマシ」

エルマー「ケツ……。ねえさんもどうかしてるよ。兄さんが残してくれたこのアパートに、

あんな連中を住まわせるなんて」

マリア「背に腹は替えられないだろ。文句があるなら、あんたが働いて金入れな！」

エルマー「俺が……。好きで……。毎日こうやって飲んだくれてると思うのか……」

エルマー、めそめそ泣き出す。

シュテファニー「また始まった……」

エルマー「俺はなあ、仕事を奪われたんだ！ あの強欲な成金どもに！ 街をってみろ！

どこもかしこもユダヤ人の店ばっかじゃねえか！ ユダヤユダヤユダヤユダヤ！ 誇り

高いドイツ民族が働ける場所がどこにある！」

マリア「誇りでパンがくえりゃあいいけどね！（シュテファニーに）荷物はそれで終わ
り？」

シュテファニー「ええ。ぜーんぶ私一人で運び終えたわ！」

エルマー「ふんっ」

マリア「あんな日の当たらないトコジラミだらけの部屋、金持ちの坊ちゃんにはなじまない
んじゃ無いかしらねえ」

エルマー「もとは俺の部屋だぞ。俺の」
シュテファニー「でもうちの中では一等広いわ。お掃除もしたし、きつと気に入ってくれるはずよ」

下手でノック音。

僚太（声）「ごめんくださいーい」

シュテファニー「いらしたわー！」

エルマー「ケッ！」

シュテファニー、身なりを整えて出て行こうとするが、マリアに止められる。

マリア「やめなさい年頃の娘が。はしたない。（下手に向かって）どうぞ。鍵は開いていますわ」

シュテファニー一生懸命可愛らしい笑顔を作る。ぞろぞろと入ってくる僚太たち。

僚太「あのー……」

シュテファニー「なんなのあんたたち」

エルマー「また移民だよ！ どこもかしこも移民だらけで、一体どうしちゃったんだ！ ハ
プスブルク帝国は！」

板垣「あ、俺たち、アドルフ・ヒトラーさんの荷物を届けに来たんですけど」
マリア「ああ、預かっておきますわ。どうも」

僚太、マリアにスケッチブック以外の荷物を受け渡すが、もじもじとその場に留まる3人。

マリア「まだなにか？」

僚太「あのー、ヒトラーっていつ帰ってくるかわかりますか？」

エルマー「呼び捨てかよ」

板垣「あ、ヒトラーさんです」

マリア「ヒトラーさんなら、同居人のクビツェクさんとオペラを見に行ってるはずですから、帰りは遅くなると思いますよ？」

顔を見合わせる、僚太、朝利、板垣。

マリア、不審に思っ

マリア「変わったお洋服ですわね……」

シュテファニー「まるで下着」

マリア「……出身はどちら？」

僚太「日本」

エルマー、飛び起きて、

エルマー「日本?! あロシアに戦争で勝った?!」

僚太「ロシアと戦争なんかしたっけ？」

板垣「日露戦争」

僚太「俺日本史専攻だから」

板垣「日本史でも習うよ」

僚太「あはい、ロシアに勝った日本です」

にわかに沸き立つエルマーとマリア。

マリア「まあー!」

エルマー「我らが盟友日本! ほら! そんな所に立ってないで、もっと中に入ってきたまえ!」

エルマーに促されるままホールの中まで入ってくる3人。

僚太「なんか気に入られたんだけど」

エルマー「君たちのおかげであの野蛮なロシア人達がどれだけ大人しくなったか! ほらくつろいで、酒でもいいやいなさい」

シュテファニー「お酒なんてもうないわよ!」

マリア「ヒトラーさんにどんなご用事？」

僚太「実は……」

下手で物音。

シュテファニー「次こそ彼だわ!」

マリア「こらシュテファニー!」

シュテファニー玄関へ向かう。

しかし、入ってきたのはアドルフとアウグスト。

アドルフ「君のせいでタンホイザーを見逃したじゃないか！」
アウグスト「君が待ち合わせに遅れたからだろう？」

アドルフ「いいや、君がもたもたパンを買ってたからだ！ 小銭を取り出すのにあんなに手間取るなんて」

シュテファニー「なんだ、あんたたちか」

アドルフ「なんだとはなんだ」

アドルフとアウグスト、僚太たちに気付く。

アドルフ「……」

僚太「おう」

アウグスト「あ！ 君たち、ちゃんと荷物を届けてくれたんだね！（マリアから荷物を受け取りアドルフに渡す）ありがとう！ ほら、お礼を言いなよドルフィ」

アドルフ「……なんだよ」

僚太「実は俺たち、君の受験をサポートしに来たんだ。日本国政府から特別の要請を受けて」

僚太、学食のリニューアルオープンチラシを周囲に素早く見せて、素早くしまう。

板垣「あ、学食のチラシ」

エルマー「なんて書いてあった？」

シュテファニー「日本語なんか読めないわよ」

アウグスト「（歓迎ムードで）日本ってあの日本?!」

僚太「俺は齋藤僚太。あっちは朝利悠人と板垣健介」

朝利「（下手な芝居で）俺たち日本の美術アカデミーの学生んだけど、海外の特に優秀な

画学生、つまり君に力を貸してやれって命じられてるんだ！」

板垣「アドルフ・ヒトラー。俺たちは必ず君をウィーン美術アカデミー合格へと導いてみせる！ あってる？ これであってる？」

アドルフ「俺が……特に優秀な画学生？」

アウグスト「ドルフィ！ すごいじゃないか！ 君、日本政府に選ばれたんだって」

エルマー「すばらしい！ 俺はますます日本のことが好きになったぞ！（エルマー、ソファーに寝てしまう。）」

シュテファニー「おじさん！ ちょっともう飲み過ぎよ」

マリア「ヒトラーさんがそんなに立派な人だったなんてね」

アドルフ「そうか……やっぱり俺には特別な才能があるんだ」

僚太「一緒に頑張ろう。アドルフ・ヒトラー。いや、アドルフ」

僚太、アドルフに手を差し出す。

アドルフもそれに答えようとするが、

アウグスト「よかった。僕、前々から君にはちゃんとした絵の先生が必要だと思ってたんだ」
アドルフ「(手を引っ込め)……は？」

アウグスト「うん？」

アドルフ「なんて言った？ グストル」

アウグスト「よかったーって」

アドルフ「俺にちゃんとした絵の先生が必要だって？ どうして君にそんなことがわかるんだよ」

シュテフアニー「始まったわよ」

アウグスト「え、だって……」

アドルフ「俺の記憶では、君はしがない音楽学校の生徒だったけどな。いつから美術評論家になった？」

アウグスト「そりゃ僕は絵の方には明るくないさ。けど君がいつだってひとりぼっちで絵を描いてるのは知ってるよ。作品を見せ合う画家仲間だっていないじゃないか」

板垣「そうだったんだ……」

朝利「なるほど……」

僚太「そういうタイプか……」

アドルフ「芸術家ってのは孤独なものなんだ！ 自分の心の声に耳を傾け、それをキャンパスにぶつける。仲良しこよしでやるお遊びじゃない！ 本当に君はなにもわかってないな！」

アウグスト「そうかなあ。僕の知り合いはよく合同で展覧会を開いたり、カフェでお互いの作品を批評し合ったりしてるけど……。単純に君に友達がいなくていいだけなんじゃないのかい？ (全く悪気無く)」

アドルフ「うるさい！」

板垣「なんかあの人、結構ずけずけ言うね」

アドルフ「君の友達なんてみんな、*“芸術家風”*じゃないか！ 分かった事を言うなよグストル！ 俺にはあんな連中の指導なんか必要ない！」

板垣「あら」

朝利「おいおいおい」

アドルフ「大体、日本なんて遅れた国の画学生が俺になにを教えられるって言うんだ」

朝利「はいカッチーン」

アドルフ「なんだよ」

朝利、アドルフ、睨み合うが、

朝利「(僚太に)おい僚太！ やっちまいな」

僚太「は？」

朝利「なんか描いてみせろよ。(アドルフに)こいつの絵を見ればそんな生意気な口聞けな

くなるからな！」

僚太「なんで俺が！」

朝利「俺らの中じゃ、お前がいちばんうまい」

板垣「それはたしかに！」

アウグスト「ドルファイ、彼の絵の出来がよかったら、大人しく彼らに指導を受けるんだよ？」

アドルフ「見ものだな」

僚太「覚悟を決めて」よっしゃー！」

板垣「(スタンドからの応援風に) 大丈夫大丈夫出来るよー！」

朝利「オーフェンス！ オーフェンス！」

僚太「あ、鉛筆が無い」

アウグスト「これ使いなよ」

グストル、アドルフの画材から鉛筆を抜き取る。

アドルフ「おい勝手に……」

僚太「動くな！」

ピンと張り詰めた空気。

アドルフ、思わずその場で止まる。

僚太、アドルフをじっと見据え、スケッチブックに鉛筆を走らせる。

アドルフとエルマー以外の面々、スケッチブックを見ようと僚太の周りを取り囲む。

僚太の集中が高まり……

僚太「まあ、こんなもんかな」

シュテファニー「すごい……」

アウグスト「……これ、君そのものだ」

マリア「うまいもんだねえ」

アウグスト「ドルファイ、これは神様が君に与えてくれたチャンスだよ」

アドルフ「……」

僚太、スケッチブックを差し出す。

アドルフ、そこに描かれた自分自身を見つめる。

アドルフ「……そっくりだ」

と、エルマーのそのそと、スケッチブックを覗き込む。

エルマー「ぷっ！　なんだこりゃ！　あんたそっくりじゃないか！　青白くてガリガリで、目ぼっかりぎらついてさあ！　あーおっかしい！　あんたそのもの！　こりゃ傑作だ！」

エルマー、馬鹿笑いする。

アドルフ「……」

シュテファニー「ちょっとおじさん……」

アドルフ「こんなの俺じゃない。下手くそ！」

僚太「テメーいまなんつった?!」

板垣「まあまあまあ」

アドルフ「帰れ。お前らの助けなんかいらぬ」

アウグスト「ドルフィ！」

板垣「ねえ！　ちよつとまづいんじゃない?!」

アドルフ、二階の自室へ向かう。

と、アロンが下手から姿を現す。

アロン「じゃあ代わりに、僕の先生になってくれませんか？」

シュテファニー「エッ！　もしかして……」

アロン「申し訳ありません、楽しそうに話してらしたので、声をかけるタイミングを失ってしまつて……」

シュテファニー「(身なりを整えながら) やだ、いつから見えました？」

アロン「ツアクライス夫人？」

マリア「ああ、ええ」

アロン「初めまして。アロン・クラウスです。ポーランドから来ました。美術アカデミーの受験が終わるまでこちらにお世話になります」

アドルフ「アロン・クラウス……。ユダヤ人か？」

板垣「ユダヤ人……」

アロン「でも、うちは祖父の代からカトリックに改宗してますから」

エルマー「騙されるなよー日本人。こいつらはそうやってドイツ民族になりすまして、俺たちの上前をはねてくんのだ」

シュテファニー「ちよつとおじさん」

エルマー「チッ……」

アウグスト「君も美術アカデミーを目指してるの？」

アロン「はい」

アロン「でも、僕のまわりには絵の先生がいなくて、ずっと独学でやってきたので不安で……。君たちならいい先生になってくれるんじゃないかって」

僚太「あー……でも俺たちい、アドルフ・ヒトラーくんのためにここにいるって言うかあ」

アロン「もちろん謝礼はお支払いします。指導して戴いてる間の皆さんの滞在費も」
板垣「滞在費……?」

アロン「宿はどちらですか? そちらに小切手を贈らせます」

マリア「小切手……」

シュテファニー「本当にお金持ちなんだわ……」

板垣「宿!」

朝利「やべー、考えてなかった」

シュテファニー「あんた達宿無しなの?!」

アウグスト「大変じゃないか! 僕たちの部屋は……」

アドルフ「俺たちの部屋は君のグランドピアノのせいで足の踏み場もないだろ!」

僚太「ピアノ?」

朝利「さつき音楽学校の生徒だって言ってたろ」

アウグスト「そうなんだ。しがない音楽学校のね」

僚太「ここってまだ部屋は……」

マリア「あー……」

マリアとシュテファニー、エルマーをジッと見る。

エルマー「おい! 俺をさらに追い出そうって言うのか?!」

マリア「ごめんなさいね。うちはもう満室で」

アロン「だったら僕の部屋はどうです? 四人でいっしょに使うんです。部屋代は、とりあ

えず一人10クローネとか……」

マリア「あんたの部屋に4人ですんで一人10クローネ?!」

シュテファニー「もともと15クローネの部屋なのよ? 40クローネなんて払いすぎ」

マリア「黙ってな!」

アロン「いいんです。僕が無理を言っているだけなので。食事もつけてもらっていいですか? 4人分。もちろん別途お支払いします」

アロン、小切手を書いてマリアにわたす。

マリア「あらあらまあまあありがとうございます。そうだ、マットレスを用意しましょうね

。シュテファニー! エルマー! 手伝って!」

板垣「え、え、え、え、どうするの?!」

エルマー「なんでも金で買いやがる(去りかけて)」

マリア「どこいくの!」

エルマー「パブ!」

エルマー、下手から出ていく。

マリア「まったくもう……。それじゃあ、狭いけど、4人で仲良く暮らしてちょうだいね」
アロン「(僚太たちに) よろしくお願いします」

アドルフ「待て！ 彼らは僕のために日本からわざわざ来てくれたんだぞ。それを横取りしようなんて、随分凶々しいじゃないか」

アロン「でも、君、彼らの指導は受けないって」

アドルフ「そんなこと言っていない」

アウグスト「言ってた言ってた」

アドルフ「うるさい！ (僚太達に) 悪かったね。さっきは君たちの熱意をちょっと試させてもらったんだ。君たちが真剣だったことはよくわかったよ。これからよろしく」

板垣「よく言うよ……」

僚太「あ、ああ！ よろしく！」

アロン「えっと、じゃあ僕は……」

アドルフ「引き続き独学で頑張りたまえ」

朝利「ひでえなあ」

アロン「そうなる……他の先生を探さなきゃいけませんね。すみません、謝礼や滞在費の話は無かったことにしてもらえませんか？」

板垣「あ、やばいやばいやばいやばい……」

シュテファニー「おかあさーん。さっきの小切手、アロンさんに返して」

マリア「だめよー!!」

僚太「2人まとめて面倒を見る！ それでいいだろ？」

アドルフ「まとめて？」

板垣「うんうん！ そうしようよ！」

朝利「そうそう、ライバルがいたほうがお互い切磋琢磨してより上達が早くなるかもしれないし！ ねー！」

マリア「そうしなさい！ ね！」

アドルフ「……」

アウグスト「ドルフィ、いいよね？」

アドルフ「俺が？ ユダヤ人と一緒に？」

アドルフ、アロンを舐めつけるように見ながら、アロンの廻りをぐるりと回る。

アドルフ「君の絵を見せてみろよ」

アロン「僕の絵を？」

アドルフ「これは試験だ。君が僕のサロンにふさわしい才能の持ち主か見極めてやる」

朝利「いつの間にお前のサロンになったんだよ」

アウグスト「無理して見せなくてもいいよ。どうせ、なんだかんだと難癖つけて君を仲間はずれにしたいだけだから」

アドルフ「グストル！俺は公正な男だ！」

アウグスト「はいはい。なに言われても気にしなくていいからね」

アロン「じゃあ、これ……」

アロン、アドルフにスケッチブックを渡す。

アドルフ「……プツ……くくく……。なんだよこれ君、ひどいな！人間がみんなひしゃげてるじゃないか！ ていうかこれ人間か？濡れた雑巾の固まりにしか見えないよ！」

アウグスト「ドルフィ、あんまり意地悪なこと言うなよ」

アドルフ「いや確かに、これは勉強が必要だ。いいよ、君、僕のサロンに入り給え。さすがに君を見放すのは気が引ける」

アロン「ありがとうございます！（僚太たちに）よろしくお願いします！」

アドルフ「君たちもほら、見てみるよ！傑作だから！」

朝利「趣味の悪い奴だな」

僚太たち、アロンのスケッチブックを見て、固まる。

僚太「……光ってる。（スケッチブックをめくりめくり）これも……これもこれも、これも

……。ええと、君、名前は？なんだっけ？」

アロン「アロン・クラウス」

僚太「知ってる？」

朝利「いや……」

板垣「僚太は？」

僚太「うそだろ？これだけのものを描く画家の名前を俺が知らないなんて、あり得るのか？」

板垣「ユダヤ人だから……？」

僚太「……」

アドルフ「おい！なにコソコソしてる！」

僚太たち、ハッと我に返る。

アロン「ごめんなさい。あんまりへたくそでびっくりしたんですよね」

僚太「いや……」

シユテファニー「（スケッチブックを覗き込んで）あーえーと、私はとっても素敵な絵だと思っわよ！この岩の絵なんて特に！」

アロン「あーそれ、ウサギです」

シュテファニー「そ、そうだと思った！ 可愛い〜！」

アドルフ「ははは！ アロン！ 僕たちの足を引っ張らないように頑張ってくださいよ！」

僚太「アロン！」

アロン「はい？」

僚太「頑張ろうな」

アロン「はい！」

転換。

それぞれが、それぞれの部屋へ戻っていく。

ふと立ち止まり、階上と階下で見つめあうアドルフとアロン。

アドルフは去り、それを受けてアドンも部屋へ戻る。

《下宿》

壁に開けられた窓の中で、僚太、朝利、板垣の3人が小さくまとまって板垣のスマホを覗いている。

板垣のスマホの画面を想起させる映像が映し出されている。

「アロン・クラウス 画家 ウィーン」

「検索結果なし」

板垣「やっぱり、アロン・クラウスって名前の画家は検索には出てこない……」

僚太「てかネットも通じるんだ……」

朝利「途中で挫折したとか？」

僚太「あれだけの才能の持ち主だぞ？ ありえない」

板垣「殺されちゃうから……？」

僚太「ユダヤ人ってこのあとどうなるの？」

朝利「大量虐殺されたつてのはなんとなく知ってるけど、なにがどうしてそうなったのかはよくわからんな」

板垣「あの辺の歴史の授業めっちゃ駆け足だよね」

映像「ユダヤ人 虐殺 検索」

ユダヤ人迫害の写真資料が映し出されていく。

それとともに群衆が現れ、ステージングによってユダヤ人迫害の歴史を表現する。

僚太「ヒトラーはあらゆるものを迫害の対象とした。共産主義者、社会主義者、社会民主主義者、ロマ族、エホバの証人」

朝利「ポーランド人、ソ連の戦争捕虜、アフリカ系ドイツ人、障害者、同性愛者、敵対的な作家、芸術家」

板垣「中でもヒトラーが最大の敵と見なしたのが、ユダヤ人だった」

僚太「ヒトラーはドイツ社会の諸問題すべての責任がユダヤ人にあると考えた」

朝利「『ユダヤ人種』はもともと劣等な人種であり、その血が優性人種『アーリア人』を腐敗させると信じた」

板垣「ヒトラーはドイツ社会からユダヤ人を完全に排除することを目指し、彼らの仕事、家、財産、自由を奪った。収容所に押し込め劣悪な環境で強制労働させ、刃向かうものは殺し、従順であっても気に入らなければ殺した」

僚太「やがて、ユダヤ人問題の『最終的解決』として、ユダヤ人絶滅計画が実行された。最終的解決とは、ヨーロッパの全ユダヤ人をガス室や射殺などの方法で殺害すること。これによって約600万人のユダヤ人が虐殺された。これはヨーロッパに住んでいたユダヤ人の3分の2にも及ぶ数である」

ステージング終わる。

言葉を失う三人。

下手、階段踊り場に鷺塚と藍島登場。

《アトリエ》

藍島「おい！ おい！ あいつ電話切りやがった。（電話かけ直す）……話し中ってなんだよー！」

鷺塚「5時……？」

藍島「ワッシーどうしたの？」

鷺塚「あいつら今、5時っていったよね？」

藍島「うん」

鷺塚「……むこうのほう時間が流れが速い」

藍島「どゆこと？」

鷺塚「このタイムマシンは現在と過去をこう、重ね合わせて串刺しにすることでタイムスリップを実現してる。つまり、タイムスリップ時点ではこちらとあちらの時間は同じはず。

なのに今あいつらのいる場所は5時。向こうの方が300倍時間の流れが速い！」

藍島「つまりどういうこと?!」

鷺塚「早くこっちに呼び戻さないと、あいつらよぼよぼのジジイになっちゃうってこと！」

《下宿》

板垣「これ全部、アドルフがやったこと？」

僚太「あいつ……何でそんなこと……」

朝利「狂ってると思えんな」

板垣「でも今のアドルフは。ちょっとアロンに対して棘はあるけど、普通の浪人生だったよ？ そんな、こんな事を平気でやるような人間には見えなかった……」

僚太「画家に、なれなかったから……？」

朝利「マジで、合格させないとヤバいってことだな……」

板垣「うん……」

僚太「アロンのためにも」

板垣「あ、ヤバイ、電池がけっこう……」

朝利「気をつけろよ？ 充電切れたら終わりだぞ」

僚太「電源切っとけ！」

板垣「あ、ちょっとメールだけ」

《アトリエ》

藍島「とにかくワッシーはそれ直して！ どのくらいで治る？」

鷺塚「メインの基板に損傷がなければ、1時間半……余裕を持って2時間と考えると……」

藍島「2時間たつと向こうではどのくらいたっちゃうの？」

鷲塚「(そろばんをはじく仕草) 25日！」

藍島「25日?! とにかくタイムマシンが直るまで大人しくしとけて連絡するわ！」
鷲塚「わかった！」

《下宿》

板垣「電池切れそうなので、しばらく電源切っておきます。また連絡します。なんかあったらメールください」

板垣が電源切ると、三人の姿も消える。

《アトリエ》

藍島「電源切ってる!!! おーーーーーい!!!」

藍島、慌ててメールを送る。

壁面に藍島のメール内容が映し出される。

「とりま、一九〇八年のウィーンはこっちより時間の流れが三〇〇倍早いらしいわ。

こっちでは二時間後、そっちの時間では二五日後に、あんたらを呼び戻すためのタイムスリップする予定。

二五日後、八月二八日の一七時に元いた場所にいるように！」

それまで余計なことせず、なんとか生き延びろよ!

迫伸。携帯の電波に要注意。by 鷲塚」

藍島「送信!!!」

朝。

僚太、朝利、板垣が叫びながら舞台後方から飛び出してくる。
アウグスト、シュテファニー、マリアも驚いて顔を出す。

アウグスト「なに?! どうしたの?!」

シュテファニー「ちよつと! 何事?!」

僚太「虫! 虫! 虫が!!」

朝利「朝起きたらベッドに大量に湧いてたんだよ!」

板垣「頭、頭! とつてとつてとつて!」

アウグスト、僚太の顔を平手打ち。

僚太「てえ!!」

アウグスト「……なんだ。トコジラミじゃないか」

僚太「トコジラミ?」

シュテファニー「なんでもう……ビツクリさせないでよ」

アウグスト「トコジラミを知らないのかい? へー! 日本って清潔な国なんだなあ!」

朝利「安全な虫なのか?! ヤバイ病原体を保有してたりしないだろうな?!」

アウグスト「大丈夫だよ。刺されたところがちよつとかゆくなくなるだけさ」

僚太・朝利・板垣「……」

誰彼ともなく、身体をかき始める。

僚太「かゆ……」

板垣「え、かゆ〜〜〜!」

アウグスト「ちよつと……いや、かなりかゆいかな」

マリア「お湯沸かしてやんな」

シュテファニー「は〜い(上手へはける)」

マリア「暖めたら少しは楽になるからね」

アロン、平気な顔でやってくる。

アロン「朝からにぎやかですな」

朝利「おまえはなんで平気なんだよ!」

アロン「(小瓶を取り出し)楠のオイルです。これをシートに数滴垂らしておくトコジラミが寄ってこないんですよ」

板垣「ずるう〜」

僚太「あんたもオイル使ってるの？」

アウグスト「いや。僕はさされすぎてなにも感じなくなった」

マリア「(上手に向かって) シュテフィー？ 今日洗濯した後掃除をするからね」
シュテファン(声)「エルマーおじさんは？」

マリア「パブに行ったつきり帰ってこないよあの穀潰し」

マリアも上手へ去る。

板垣、部屋の片隅へいき、コソコソと携帯をいじりはじめる。

トコジラミのことを調べているのだ。

板垣「とこじらみ……対処法……」

アドルフ、画材を小脇に抱えて登場。

アドルフ「君たち！ なにをもたもたしてるんだ、さっさとはじめよう」

僚太「あ、おお」

アドルフ「君も早く準備したまえ。試験はまってくれないぞ」

アロン「うん」

アウグスト「彼、君たちのこと気に入ったみたいだ」

僚太「そうなの？」

アドルフとアロンはイーゼルとスケッチブックを用意する。

アウグストも2人の準備を手伝ったり、身支度をしたり。

板垣の携帯にメール受信。

板垣「……二五日?!」

朝利「おい、こんなところで見て大丈夫かよ」

板垣「これ……」

僚太、朝利、携帯のぞき込み、

僚太「二五日?!」

朝利「でも向こうでは二時間しか経ってない……ってことは……」

僚太・朝利・板垣「すげー!!!」

僚太「夏休み増えたー!!」

板垣「教員採用試験までには帰れる〜。よかった〜」

僚太「てことは、二五日でヒトラーに受験テクを伝授して……」

朝利「お前は卒制を完成させる」

僚太「時間は限られてる。効率的にやっつけていこう」

板垣「電波に要注意ってどういうことだろ？」

朝利「今何本立ってんの？」

板垣「4本だけど」

朝利「じゃあいいんじゃないん？」

と、鍋と手ぬぐいを持ったシュテファニー、三人を覗き込み

シュテファニー「なにしてんの？」

板垣「いや別に！」

シュテファニー「ほら！ お湯沸いたわよ」

僚太達はわらわらと鍋に群がり、温められた手ぬぐいで虫刺され跡を温める。

シュテファニーは中央奥へ去る。

アドルフ「さっさとしてくれないか」

僚太「はいはい。じゃあまずは、試験内容を確認しよう」

アドルフ「一次試験は基礎的なデッサンだ。時間内に与えられた課題をこなす」

アウグスト「去年、ドルフィは一次試験には合格したんだよ！」

アロン「すごいですね！」

アドルフ「……当然だ」

僚太「基礎的な技術は問題ないってことか。二次試験は？」

アドルフ「作品提出」

僚太「どうだったんだよ」

アドルフ「人物画が足りないという理由で落とされた」

アウグスト「人物画が苦手なんだよ」

アドルフ「苦手じゃない。好んで描かないだけだ」

僚太「なるほど。ここから導き出される攻略法はただ1つ」

アドルフ「なんだ？」

僚太「練習あるのみ」

と、洗濯籠を持ったシュテファニーが通りがかる。

僚太「（シュテファニーに）ちよつと、モデルになってくれない？」

シュテファニー「ええ？ 今日忙しいんだけど！」

アロン「お願いできませんか？」

シュテファニー「もちろんですわ」

僚太「じゃあ、このあたりに座ってもらって……」

シュテファニー「気合いを入れてポーズをとる。」

僚太「楽にしてもらっていいから」

シュテファニー「あっそ」

アロン、良きところにイーゼルを置くが、アドルフそれを遠くまで追いやってしまった。
う。

アロンはそれを気にするでもなく、追いやられた場所で絵を描き始める。

アドルフも描き始めようとするが、

板垣「あ、あ、あ、あ、ちょっと」

朝利「板垣？」

板垣「描き始める前に、ちょっと約束して欲しいことがあるんだ」

アドルフ「なんだ、早くしろ」

板垣「同じ芸術を志すもの同士、仲良くしよう。俺たちとも、アロンとも、な？ ユダヤ人とか日本人とか、男とか女とか、何歳とか、先生とか生徒とか、そういうの関係なく、みんな楽しくやったほうがいい作品が作れるからね」

朝利「お、さすが。先生っほいな」

板垣「だってこれ言つといたほうがいいでしょ……」

アウグスト「わかった！ よろしくね、アロン」

シュテファニー「日本て進んでるのね」

アドルフ「おい。自由主義者の口車にほいほい乗せられるなよ」

板垣「自由主義者って何？」

アドルフ「男は男、女は女、ユダヤ人はユダヤ人。しっかり分けて考えないと、国家は腐敗するぞ」

アウグスト「もう。すぐそうやって何でも大きさに考えるんだから。そもそも僕は君みたいにユダヤ人を嫌ってないもの」

アドルフ「俺だってべつにユダヤ人を嫌ってるわけじゃない」

朝利「あ、そうなの？」

アドルフ「ただ奴らを自由させておくことで、ドイツ民族が割を食うのが我慢できんだだけだ」
板垣「とにかく仲良くしろ！ それができなきゃ、絵は教えない！」

アドルフ「……」

アロン「君の邪魔はしません」

アドルフ「……そうしてくれたまえ」

シュテファニー「日本のアカデミーには女の子もいるの？」

僚太「そりゃそうだよ」

シュテファニー「信じられない」

僚太「なにが？」

アロン「僕の姉は工芸学校へ進学しましたよ」

シュテファニー「えっ」

アロン「母が言っていました。本当は、女性にも男性と同じような能力があるって。だからこれからは女性もちゃんと教育を受けて、社会に進出していくべきだって」

アドルフ「そうやってお仲間をアカデミーに送り込んでドイツ文化を侵食しようって魂胆だろう」

板垣「こらー」

シュテファニー「アロンは、職業婦人って、やっぱりはしたないと思う？」

アロン「まさか。素敵だと思います」

シュテファニー「そう？」

アドルフ「女にはたくさん子どもを産み育てるって立派な仕事があるだろう」

シュテファニー「(とても冷たい視線を送る)」

朝利「うわ俺そういうのマジ引いちゃうわー」

アドルフ「なにがだよ！」

僚太「はいはいほらもう！ はじめるぞ！」

アドルフとアロン、鉛筆を持つ。

僚太「まずは全体を大きく捕らえる」

描き始める2人。

板垣「すぐに描き始めなくていいよ。まずはよく観察して……」

朝利「完成形をイメージする……」

僚太「モデルが持つてる雰囲気掴むんだ。丸いのか四角いのか。細いのか太いのか。なめらかなのかざらついているのか」

アドルフ、うまくいかないのか絵を破り捨てる。

アロン「あのそれってつまり……」

僚太「ん？」

アロン「見たまま描けばいいってことですか？」

僚太「……あうん、そうだね」

朝利「身も蓋もないな」

アロン「すみません、よくわかってなくて」

アドルフ「……なんで君みたいなのが画家を目指してる」

アロン「小さい頃から絵を描くのが好きで」
アドルフ「下手の横好きってやつか」
アロン「ほんとにその通りなんですけど、父が……。僕は画家になるべきだって」
アドルフ「父親が？」
アロン「父は一族から画家を出すのが夢で」
アドルフ「お父上は知るべきだな。金で才能は買えないって」
シュテファニー「ちよっと」
アロン「僕もそう言ったんですけどね」
板垣「もうほら、終わり終わり」
僚太「集中しろよ」
アロン「すみません」

アドルフ、アロン、筆を進める。

と、マリアが掃除道具を持ってやってきて、

マリア「シュテフィーー！ なに油売ってるの」

僚太・朝利・板垣「しい！」

マリア「まったく……ご苦労なことですわね！」

マリア、掃除ついでにアロンの後ろを通りがかると、アロンの絵が気にかかる。
朝利と板垣もアロンの絵が気になってくる。

そうになると、アウグストもアロンの絵が気になってくる。

その場の主役が自分ではなくアロンであると感じて、アドルフは落ち着かなくなってくる。

アドルフ「(シュテファニーに) 何見てる」

シュテファニー「は？」

アドルフ「今俺を見てただろう。バカにしたような目で」

僚太「アドルフ？」

シュテファニー「あんたのことなんてこれっぽっちも見ませんけど?!」

アドルフ、うろつき始める。

アウグスト「(なれた様子で) ドルフィー、クッキー食べる？」

アドルフ「どいつもこいつも俺をバカにしゃがって！」

朝利「おいどーした」

アウグスト「いつものことだから」

アドルフ「見るな！」

シュテファニー「だから見てないって！」

僚太「落ちつけて。モデルは見られる側。お前が見る側。ほら」

アドルフ、僚太に促されて渋々席に着く。

僚太「ほら、ちゃんと見ろ」

アドルフ「(ギョツと目をそらす)」

僚太「ちゃんと見るんだ、アドルフ」

スケッチブックと向き合うアドルフの前に父、アロイスの幻影が現れる。

アロイスの手には、アドルフが描いた何枚もの絵。

アロイス「画家になりたいだ？」

アドルフ、ギョツと立ち上がる。

アロイス「お前は、偉大なるハプスブルク帝国に使える役人になるんだ。俺のように」

アドルフ「父さんだって俺の絵を見れば、俺が役人になんてなる必要なんて無いってわかる！」

アロイス「お前の絵ってこれか？ 冗談はよせ」

アロイス、アドルフの絵を放り投げる。

アドルフのまわりに落ちるスケッチ達。

アロイス「こんなものがなんになる。お前はまた子供だからわからないかもしれないがな。

世界は広い。リンツの田舎町で暮らすお前には、想像もつかんほどに。このくらの絵を描けるヤツはごまんといる。そいつらの多くが、誰にも知られず、なにも残せず死んでい

くんだ。そんな風になりたいのか？」

アドルフ「俺はそんな連中とは違う」

アロイス「自分が特別だなんて言う妄想を抱くのよせ」

アドルフ「うるさい……」

アロイス「お前は特別なんかじゃない」

アドルフ「うるさい！」

アロイスの幻影が消え、我に返るアドルフ。

僚太「なんだよ……」

アウグスト「ドルファイ？」

僚太「あーあー散らばっちゃって」

僚太、アドルフのまわりに落ちたスケッチを拾ってやろうとするが、

アドルフ「自分でやる」

アドルフ、自分で拾っているうちに。

アドルフ「やめだ。こんなの。描けるわけない」

僚太「おい」

アドルフ「モデルが悪すぎる」

シュテファニー「はあ〜？」

アドルフ「俺が描くのにふさわしくない。俺が描くのはもっと、ワーグナーの描く女性のよ
うに、高貴で清純でなければならぬ」

シュテファニー「わるかったわね」

アドルフ「そうだ、俺が描くべきはリンツのあの子だけだ」

板垣「リンツのあの子？」

アウグスト「ああ、ドルフィの想い人だよ。シュテファニーと同じ名前なんだ」

アドルフ「やめろグストル！ あの子とこいつがおなじ名前だなんて悪夢、俺に思い出させ
るな！」

シュテファニー「母さんこいつさっさと追い出してよー！！」

僚太「モデルをえり好みしてる場合じゃないだろ」

アドルフ「だいたいなんで人物画なんか描かなきゃならない。俺は、風景画家だ！ 特に、

美しい建物専門の。去年試験官にも言われたんだ、俺には建築家の才能があるって」

朝利「それって、画家の才能はないってこと？」

アドルフ「違う！ そのくらい俺の描く絵が精巧だってことだよ」

興奮して喋るアドルフの周囲にオーラが立ちのぼりはじめる。

アドルフ「お前たちには理解できないだろうが、俺の頭の中には壮大な芸術的世界の創造計

画がある。このウィーンをまるごと作り替えるほどの。それだけの芸術的インスピレーシ

ョンがあるんだ！ 俺のここに！ それをこんな、下らない人物画なんかではかられて

たまるか！」

アドルフ、スケッチブックと画材を手早くとりまとめると出ていこうとする。

がそこにエルマーが千鳥足でやってくる。

エルマーはチラシを持っている。

エルマー「おいなんだよ危ねえなあ」

アドルフ、酒臭いエルマーをウツとよける。

マリア「どこほつつき歩いてたんだい！」

エルマー「みてわからない？ ほれ。ほれほれ」

マリア「どうせバブだろ」

エルマー「ぶうー。(チラシを見せびらかして)ルエーガー市長の演説だよ」

マリア「あら、いいわね。相変わらぬいい男だった？」

エルマー「そりゃもう。ルエーガー市長は俺たちに約束してくれた！ 必ず、このウィーン

をユダヤ人どもから取り返すってな！」

シュテファニー「ちよつとおじさん……」

エルマー「気をつけろヒトラー。こいつは友人のフリをしてお前を奈落の底に突き落とす。

アカデミーに用意されたお前の椅子を、横からかつぱらおうって魂胆だ」

アドルフ「……」

アロン「そんなこと、あるわけないじゃないですか」

エルマー「その証拠にお前の絵の先生をすっかり自分の物にしてるだろ？ 金に物言わせ

てな。ユダヤ人らしいやり方だよ」

シュテファニー「おじさんさつさと部屋に戻ってよ！」

エルマー「女が偉そうな口きくんじゃねえ！」

シュテファニー「！」

マリア「……エルマー飲み過ぎだよ」

エルマー「触るな！ どいつもこいつも俺をバカにしやがって……」

エルマー、ソファアに座り込む。

アロン「アドルフ、僕は君を貶めようなんてしてません」

アドルフ「……」

アロン「そうだ。僕といっしょに、美術アカデミーのワシリー教授に会いに行きませんか？

父に紹介してもらったんです。挨拶に行けばなにかアドバイスがもらえるかも」

エルマー「袖の下渡しに行くのか？」

アロン「ちがいます」

板垣「おい、いい加減にしろよ……」

アロン「優しい方だって聞いてます。きつと君にも力を貸してくれるはずですよ」

アドルフ「……ユダヤ人の助けなんか借りない。こい！ グストル！！」

アウグスト「えっ！ 僕これからピオラの練習に行かなきゃいけないんだけど」

アドルフ、構わず跳び出す。

アウグスト「待ってよ！ ドルフイ！」

アウグストも荷物を持って跳び出す。
僚太もそれを追う。

僚太「おい！ アドルフ！」

板垣「え、ちょっと！」

朝利「俺たちもいこう」

朝利、板垣も出ていく。

エルマー「いつまでロビーを占領してるつもりだ」

アロン「すぐに片付けます」

シュテファニー「片付けなくていいわ！ 続きを描きましょー？」

アロン「いえ、もうかたづけけます。ワシリ―教授のところへ行かなきゃならないので」

アロン、さっさと片付けると自室へ戻る。

シュテファニー、エルマーを睨み付ける。

マリア「シュテフィー。洗濯物をかたづけて」

マリア、シュテファニー、去る。

エルマー、チラシを1人で見ている。

駆け出してくるアウグスト。

アウグスト「ドルフィ！」

アウグストをおってくる、僚太、朝利、板垣。

僚太「グストル！ アドルフは？」

アウグスト「見失った。あいつ足だけは妙に早いんだよな……。そうだ。悪いけど、ドルフィを見つけてこれ渡してくれない？ 僕もう行かなきゃいけない」

僚太「なにこれ」

アウグスト「ランチ。彼ほっとくとすぐに食事を抜いちゃうから」

朝利「こう言っちゃなんだけどさあ……。よくあれと友達続けてられるな」

アウグスト「あー、厄介だよ、彼。僕も音楽学校の友達と一緒にいられたらどんなに楽だろうって思う」

板垣「なんか弱みでも握られてるの？」

朝利「借金してるとか」

アウグスト「そんなんじゃないよ。ただ、僕がこうやってウィーンで音楽の勉強ができるのは彼のおかげだから」

僚太「え？」

アウグスト「僕ね、本当はリンツで家具職人になるはずだったんだ。父親の跡を継いでね」

板垣「へー」

アウグスト「だけどドルフィは、僕に音楽の才能があるって言って、僕の両親を説き伏せたんだ。すごかったよ！ 彼の意思の力は本当にすさまじいんだ！ そういうところを尊敬してるのさ」

僚太「うーん」

アウグスト「それに、彼のお母さんが亡くなるときに言われたんだ。『私がいなくなっても私の息子のよい友人でいてください。彼にはもう誰もいなくなってしまう』って」

僚太「……」

アウグスト「だから君たちが現れてくれて本当によかったと思ってるよ。友達が多い方がいいに決まっているから。あ、ほんとにもう行かなきゃ！」

僚太「あ、うん」

板垣「気をつけてね！」

アウグスト、走り去る。

3人、ベンチに座り込む。

板垣「えーどうする？」

朝利「アドルフの絵、どう思った？」

僚太「厳しい」

朝利「まーそうだわなー」

僚太「いや、確かに風景画とか静物画とかはそれなりに描けてるんだけど、ネックになる人物画を描きたがらないんじゃない、時間がいくらあっても足りないと思う」

板垣「え、じゃあどうするの……」

僚太「なんかあいつの絵、否定されるのを怖れてる絵だ」

朝利「裏口入学でもさせるかぁ？」

と、アロンがやって来る。

僚太「あ、アロン……」

アロン「アドルフは？」

朝利「しらね」

僚太「ごめん。さっき……」

アロン「ん？」

僚太「何も言わなくて。エルマーにも、アドルフにも」

アロン「大丈夫。よくあることですから」

僚太「……」

板垣「あ、アロンはどうしたの？ どっか出かけるとか？」

アロン「ああ、ワシリー教授のところにご挨拶に」

板垣「そうなんだ、いつてらっしゃい」

アロン、行きかけるが引き返して、

アロン「……三人もいっしょにどうですか？」

僚太「え？」

アロン「アドルフは来てくれなかったけど……君たちが来ればきつと、彼にもいいことがあるような気がする」

朝利「そんな、いいよ、君がアドルフのこと心配しなくても」

アロン「だけど、すっかり信頼を失ってしまったみたいだし。抜け駆けしたって思われたいから」

板垣「そんなの君が気にしなくてもいいよ」

アロン「僕たちはマイナスの存在だから。普通の人と同じように信頼を勝ち取ろうと思ったから、普通の人の何倍も頑張らないと」

僚太「マイナスなんかじゃないだろ」

アロン「行こう。日本からのお客さんを連れていったら、きっとワシリー教授も喜ぶよ」

四人、階段を上ってワシリー邸へ。

○ 10 . ワシリー邸

舞台二階部分の壁が開くと、そこはワシリー邸。

ワシリー、アロンのスケッチブックを見ている。

僚太、朝利、板垣は所在なさげに立っている。

ワシリー「はっはっは。なかなかいいよ君！」

アロン「本当ですか?!」

ワシリー「この調子で書き進めなさい。これなら私も自信を持って学長に推薦できる」

アロン「え?」

ワシリー「君のことはお父様にくれぐれもよろしく頼むと言われているからね」

アロン「そう……なんですか」

朝利「本当に袖の下渡してたってこと?」

板垣「朝利」

ワシリー「ああ、勘違いしないでくれよ。あくまでも君の実力があつてのことだ。堂々とし

ていたまえ」

アロン「はい」

ワシリー「ええと、そちらは」

アロン「彼らは日本からの留学生で……」

ワシリー「ああそうだった。アドルフ・ヒトラーくんの家庭教師をしているんだったかな」

僚太「はあ、まあ、そうです」

ワシリー「彼もなかなかガッツのある男だよね」

板垣「知ってるんですか?」

ワシリー「彼は去年も受けてるだろ? しかしわざわざ日本から家庭教師を呼び寄せるなんて。彼も本気だね」

アロン「あの、なにか彼にもアドバイスを頂けませんか?」

ワシリー「アドバイスか……」

ワシリー、ふむ、と考えて、

ワシリー「それじゃあ彼の家庭教師達に言付けることにしよう。君たち、まだ時間は大丈夫かね?」

板垣「あ、はい」

ワシリー「君はもう帰りました。創作のための貴重な時間がもったいない」
アロン「わかりました。ありがとうございます」

ワシリー「お父上によろしく」

アロン「失礼します」

アロン、去る。

ワシリー「さて……」

僚太「……」

ワシリー「君たちのいいたいことはわかっている」

僚太「はい？」

ワシリー「アロン・クラウドさんと同じように、アドルフ・ヒトラーくんも、学長に推薦してほしいというんだろ？」

僚太「え？」

朝利「裏口入学ってことですか？」

ワシリー「その言い方は適切じゃないけどねえ。だがなあ……私の立場では1人しか推薦できないのだ。それに、君たちもわかっているだろう？ ヒトラー君の絵は……」

僚太「はい」

ワシリー「とてもアカデミーのレベルには達していない。私も芸術家の端くれとして、彼みたいなものを推薦するのは良心が咎めるのだよ」

僚太「そうですね……」

ワシリー「だが……あのユダヤ人を推薦するのよりはずっとマシだ」

板垣「え……？」

ワシリー「連中がウィーンを浸食しだしてからも随分時が立った。奴ら経済界だけでは飽き足らず、芸術界まで支配しようとしているのだ。あいつらは誇り高きドイツ民族の文化芸術を、後から来てかっさらおうとしとるんだよ。……とはいえ、あれの父親には世話になっているし、アカデミーへの寄付額も多い。私からむげに追いつくことも出来なくてな……」

僚太、朝利、板垣、言葉を失っている。

ワシリー「そこで君たちに提案がある。あのユダヤ人を、故郷に追いついてくれないか？ 方法はなんだって構わない。とにかくあれが受験を断念するように仕向けてくれればいい。そうすれば、ヒトラー君を必ず合格させるよ」

アドルフ、高台に現れる。

ワシリー階下を見下ろす。

ウィーンの人々が額縁を持って現れる。

ワシリー「みたまえ。街を。ウィーンは疲弊し、壊されてしまった。フランツ・ヨーゼフ皇帝は、我らドイツ民族の存在を忘れ、ユダヤ人に自由と権利を与えた。その結果がコレだ。どこへ行ってもユダヤ人しかない。劇場へ行っても、リンク通りに行っても、コンサートに行っても、舞踏会に行っても。奴らはキリスト教徒の皮を被り、我々の生活を脅かす」

ワシリー、僚太達を連れ立って街を歩く。

人々、ワシリーの言葉に應えるように、様々な困窮者の姿を演じる。

ワシリー「市場は奴らに独占され、街は失業者で溢れている。新聞は奴らに都合のいいことしか書かず、大学はもはや、ユダヤ人のための教育機関と化した。夜の闇には売春婦がひしめき、いまましい病を振りまく。ユダヤ人はこの国の病なのだ。ロシアを倒した君たちを盟友と信じて頼む。あれを、ウィーンから追いつ返すのだ」

ワシリー、街の人々、去る。

街の人々、額をひとつだけ壁に掛けていく。

取り残される三人。

街を見下ろし続けるアドルフ。

アドルフの表情は終始、よく見えない。

僚太「アロンを追い返せば、アドルフは美術アカデミーに入れる……」

朝利「逆に、アロンがこのまま受験すれば、アドルフは落ちるのか」

板垣「え、どうするの……?」

朝利「ワシリーの提案に乗るしかないだろ」

板垣「え?」

朝利「だって、俺たちはヒトラーを画家にするためにここにいるんだぞ?」

板垣「でもしたらアロンはどうなるの」

朝利「あれだけの才能の持ち主だ。アカデミーに入らなくたっていくらでも活躍できる」

板垣「でもアロンはユダヤ人なんだよ? ワシリー教授もエルマーさんも、彼がユダヤ人ってだけであんなに嫌ってる。アロンも言ってたじゃん。自分はマイナスの存在だつて。アロンにとつてはウィーン美術アカデミーに入ることが、マイナスをゼロにする方法なんじゃないの?」

朝利「でもアカデミーに入ったって、アドルフが独裁者になれば結局殺される」

板垣「……」

朝利「そうになったら元も子もないだろ? アロンだけじゃない。何百万人っていうユダヤ人が虐殺される。どっちを優先すべきかなんて、わかりきってる」

板垣「そうかもしれないけど……。でも……」

僚太「俺もワシリー教授の提案に乗るしかないと思う」

板垣「それって、歴史を変えるために、アロンを犠牲にするってこと？」

僚太「そうしなきゃ、俺は画家になれないから」

板垣「え？」

遠雷。

舞台にデジタルノイズが走る。

ノイズは壁に掛かった額のまわりにだけ残り続ける。

僚太、アドルフに気づく。

僚太「アドルフ！」

アドルフ僚太達に気づいて踵を返す。

僚太「逃げるな！」

アドルフ「誰が逃げてるって？」

僚太「俺はもう、腹をくくったからな」

アドルフ「は？」

財布を持った藍島、階段状から現れる。

藍島「1ミリの皿小ネジと、グルー買ってくればいいのね？ ついでになんか飲み物買ってくるわ」

鷲塚(声)「スタバのキャラメルモカキャラメル増しベンティー」

藍島「はいはい」

藍島、壁に掛かった額に気づく。

藍島「あれ？」

僚太「お前は絶対に画家になる！」

強いノイズが走る。

藍島「こんなところに絵なんか飾ってあったっけ？ ねえ、ワッシー？」

再び落雷。

暗転。

強い雨の音。

第2幕

○11・下宿（深夜）

明転するとそこは夜の下宿。

僚太が一人、スケッチブックに向かっていている。

外では雨が降り続けている。

僚太、スケッチブックを一枚破り捨てる。

僚太、どうにも筆が進まない。

そこへ階段上から水差しをもったアドルフやってくる。

アドルフ「……なにしてる」

僚太「作品の構想を練ってる」

アドルフ「部屋でやれよ。蠟燭無駄遣いするとツアクライス夫人が煩いぞ」

僚太「あいつらイビキが酷いんだよ。そっちは？」

アドルフ「喉渴いたから」

僚太「（察して）描いてたの」

アドルフ「……悪いか」

アドルフ、水差しを持って上手にはけるとすぐに戻ってくる。

僚太「いつもこんな遅くまで描いてんの」

アドルフ「夜のほうが頭が冴えるんだ」

僚太「わかるわー」

アドルフ「だから今朝は……」

僚太「ん？」

アドルフ「今朝は調子が出なくて」

僚太「ああ……」

アドルフ「俺だって本気出せば人物画くらい描ける」

僚太「……お前さ、なにがそんなに怖いんだ？」

アドルフ「は？ 怖くない。俺に怖いものなんてない」

僚太「はいはい、すいませんでしたね」

アドルフ「嫌いなんだよ。人を見るのが」

僚太「ん？」

アドルフ「見ると、向こうも見てくるだろこっちを。あの視線が嫌いなだけだ。親父を思

い出してムカムカするんだよ」

僚太「……へえ」

アドルフ「なにが怖いだ。怖いわけないだろ」
僚太「わかったからもう行け」

アドルフ、いったん自室に去る。
が、作品をもってすぐに戻ってくる。

アドルフ「俺が画家になるといったな」

僚太「ああ？」

アドルフ「言ってただろ。今日。橋の下で。子分たちといるとき」

僚太「子分じゃねえよ。ぶっ飛ばされるぞ二人に」

アドルフ「アレは本気か」

僚太「……ああ」

アドルフ、作品を差し出す。

僚太、作品を受け取り、パラパラとみる。

アドルフ「……どう思う」

僚太「……上手いよ」

アドルフ「そうか……。どの辺が？」

僚太「どのへんがって……。この、家の絵なんて……家に見える」

アドルフ「……」

僚太「この橋の絵なんて……すごく……橋だし……」

アドルフ「……絵をちゃんと褒められたのは初めてだ」

僚太「……なんかごめん」

アドルフ「なにが」

僚太「いや。でもほら、親には褒められたことあるだろ。子どもの頃なら！」

アドルフ「親?! あの連中が俺の絵を褒めるわけがない! あいつらは俺を役人にする
ことしか考えてなかった。俺の絵には見向きもなかったし、みるときは、俺をこき下
ろすためにみるんだ。なんだこんなもんか。たいしたことないな。やっぱりお前は役人
になるしかないって。役人がなんだって言うんだ!」

僚太「わかる……」

アドルフ「あ?」

僚太「わかるわー! あいつらさ、結局子どもの絵なんて見てないんだよ! 画家の道を

諦めさせようって、それしか考えてないの!」

アドルフ「(僚太のテンションに引いて) お、おお、なんだ?」

僚太「子どもに夢を諦めさせるっていう結論ありきの、批判のための批判なんだよ! そ
んなもん納得できるわけないよなあ!」

アドルフ「ああうん」

僚太「だいたい、なんで子どもがやりたくないつつつてること無理矢理やらせようとするんだよ。安泰だかなんだかしらないけど、そんなもん今のご時世、どうなるかわかんないじゃないあ！」

アドルフ「そうなんだよ！ お前案外物事をよく分かってるな」

僚太「一言多いんだよな」

アドルフ「今は変革の時だ。長く続いた王政の時代は終わり、ヨーロッパにおけるハプスブルク家の威光は風前の灯火。オーストリアなんていつ地図から消えてもおかしくない。そうになったら役人はどうなる？ なんの役にも立たない。お払い箱じゃないか！」

僚太「その辺の話はよく分かんないけど」

アドルフ「俺は揺るがない価値が欲しいんだ。時代が変わっても変わらない、絶対的な価値が。芸術にはそれがある」

僚太「うん」

アドルフ「不変の価値へと至る唯一の道。それが芸術なんだよ！」

僚太「(いまいち賛同できないまま) うーん……」

と、シュテファニーが眠い目をこすりながらやってくる。

シュテファニー「ねえちょっと……今何時だと思ってるの」

僚太「あ、ごめん」

アドルフ、プイツと自室へ戻りつつ、

アドルフ「明日も頼む」

僚太「ああ」

アドルフ「芸術家には優れた理解者が必要だ」

僚太「……うん」

アドルフ部屋に去る。

僚太も部屋に戻る。

シュテファニー、僚太が捨てていった書き損じに気づく。

シュテファニー「たくもー。ゴミくらいちゃんと捨てなさいよ」

シュテファニーに明かりが集まる。

シュテファニー、書き損じを拾うと中を開く。

そこにはアドルフと、ちょびひげのヒトラーが並んだスケッチ。

壁にもその絵が映し出される。

シュテファニー「……なにこれ」

朝がやってくる。

階上からはアウグストが練習するピアノの音色が聞こえてくる。

アロンがデッサンの準備をしに現れる。

アロン「おはようございます」

シュテファニー「慌ててスケッチをしまい）ああ、おはよう」

アロン「あのこれ（本を差し出す）よかったら」

シュテファニー「え？」

アロン「あ、このメアリ・ウルストンクラフトって人がすごく格好いい女性で、女性の教育や就職、政治参加のことが描かれてるんです」

シュテファニー「『女性の権利の擁護』？」

アロン「気に入るんじゃないかと思って」

シュテファニー「私に？ 本を？」

アロン「あ、はい」

シュテファニー「ありがとう！」

アドルフも出てきて、デッサンの準備をはじめ。

僚太、朝利、板垣、部屋の隅で居心地悪そうにしている。

シュテファニーもモデルとして定位置につき、本を読み始める。

シュテファニー「(アドルフに) 本読んでるから！ あんたのことは見ないからね！」

アドルフ「わかってるよ！ (僚太をチラリと見て) 今日はちゃんとやる」

板垣「(僚太と朝利に) ほんとにやるのね？」

朝利「とにかくアロンの絵をけなして、アカデミー受験を諦めさせる。この作戦でいいな？」

僚太「うん……」

アドルフ「おい。しっかり見てろよ」

僚太「わかってる」

朝利「よっしゃ俺からいったるわ……」

朝利、アロンに近づいていく。

僚太と板垣は朝利を見守る。

朝利「んー……アロン君さあー」

アロン「うん？」

朝利「君の絵ってあれだよねえ、こういうことあんまり言いたくはないんだけどお、君の絵ってさあ……（見て）うめえ……」

アロン「そうかな？」

朝利「いやちがうんだよ。（再び頑張っつてけなそうとし）いいとこばっかじゃないからアロン「うん……」

朝利「やっぱあれだよね？ あそことか。形の取り方がさ……完璧なんだよなあ……。シユテフアニーのバストアップが理想的なバランスで画角に納まつてる」

アロン「ありがとう」

朝利「だめだ。選手交代」

板垣が気乗りしないようなので僚太が行く。

僚太「でも形の取り方がうまいのと、デッサンがうまいのはまた別の話だから。別の技術だから」

朝利「そうそう」

僚太「陰影の描き方ってやっぱりセンスが問われるからね」

アロン「はい」

僚太「アロンの場合、影の描き方がさあ……かっけえー。うわなんだよこの光の捉え方！いや、この反射光をちゃんと効果的に描くことで暗い部分がちゃんと暗く見える。かつ絵が重くなってない」

朝利「はい僚太選手ーベンチに戻ってきなさい」

僚太「うまいんだよー。けなすところがないんだよー」

朝利「じゃあ次、板垣」

板垣「うーん……」

と、ワシリーがやってくる。

ワシリー「失礼」

アロン「ワシリー教授！」

ワシリー「おお、クラウス君。やはりここにいたか。お父上から住所を聞いてね様子を見に来たんだよ（僚太達の方をみる）」

僚太「……」

アロン「アドルフ、この人が昨日言ってたワシリー教授です」

アドルフ「……どうも」

ワシリー「君にも大いに期待しているよ。アドルフ・ヒトラー君。これよかったらみんなで食べたまえ」

アロン「ありがとうございます！ 夫人！」

マリア「（出てきて）はいはい」

アロン「こちら、僕たちの先生から頂きました」
マリア「あまあまどうも。シュテフィーお茶を用意して」
シュテファニー「ええ〜？」
アロン「あ、君は……ここにいてくれないと困ります」
マリア「……すぐにお茶をご用意しますわ。私が。娘がちつとも家事を手伝いませぬもので！」

マリア、シュテファニーの本に気づき、奪い取る。

マリア「シュテフィー！　なんて本読んでのの！」
シュテファニー「あっ」
マリア「こんなの、危ない人達が読む本でしょ？」
シュテファニー「そんな怖い本じゃないわ、アロンが貸してくれたのよ、ねえ？」
マリア「この子におかしなこと吹き込むのはよして下さい。まったく、油断も隙もないっ
たら……」
アロン「……すみませんでした」
シュテファニー「やだっ！　母さん返してよ！」
マリア「あんまり家事をさぼるようなら、わかってるね？」
シュテファニー「はい……」

マリア、本を持って上手へ去る。

ワシリ―「さあさあ、続けたまえ」

アドルフ、アロン、再びデッサンをはじめる。

ワシリ―「どうだね？　万事順調かね」
僚太「いやー……」
朝利（板垣に）おい、つぎ、お前だろ？」
板垣「うん……」

板垣、アロンの絵を見る。

板垣「なんていったらいいかなー、そのー……」
朝利「頑張れ」
僚太「いけいけ」
板垣「アロン！」
アロン「はい」

板垣「俺も、君みたいに絵が描ければよかったのになって、思う……」
アロン「そうですね？」

板垣「うん……」

ワシリイ「なるほど。順調、とは言えないようだ」

エルマー、ぶつくさ言いながら茶を持ってくる。

ついでにお盆に載った菓子をつまみ食い。

エルマー「男の俺が何でこんな事……ホレ、茶」

ワシリイ「おや」

エルマー「あれ？ 教授?!」

ワシリイ「どうして君が？」

エルマー「ああ、ここ俺の家で」

僚太「知り合いだったんすか」

エルマー「よく行くパブでね。俺、教授に色々教えてもらってんの」

朝利「あんたが絵の勉強？」

ワシリイ「彼は今、政治を勉強してるんだよ。熱心でね、いつも感心させられる」

エルマー「あれ？ 教授は？」

ワシリイ「受験生達の様子を見にね」

エルマー「(察して) あー。教授ともあろう人がユダヤ人のガキのお守りなんて、お気の毒なことですなあ」

ワシリイ「エルマー君ちょっと」

ワシリイ、エルマーを連れて出ていく。

アドルフ「人が多すぎる。集中できない」

僚太「まあまあ」

アドルフ「だいたいなんだよ。さっきからアロンの絵ばかり見て。君たちは僕の先生だろ？」

朝利「ああ、悪い悪い」

僚太「それはほら、文句のつけようがないから」

朝利「そう言うこと」

アドルフ「……確かに前より描けるようになってる気がする」

僚太「あー……そお？」

アドルフ「練習こそ最善の攻略法ってのはこういうことだったんだな」

エルマー(声)「あーなるほど！ わかりました！」

エルマー、戻ってくるとヘラヘラアロンの元に近づく。

絵を覗き込んで、

エルマー「変な絵ー。なにこれ、これがシュテフィーか？ どうなってんだ？ お前の目は。これでアカデミーに入ろうなんて、図太い神経だな。さすがユダヤ人だ。貸してみろよ」

エルマー、アロンのスケッチブックを奪うと中を見る。

シュテファニー「ちょっと！ 邪魔しないでよ」

エルマー、アロンの絵を見せびらかし、

エルマー「なんで人間をこんな形に描くんだよ。きもちわりい。ああそうか、ユダヤ人の身体はみんなこんな風に歪んでんだ。そうなんだろう。だからこんな絵しか描けないんだ」

アロン「(助けを求めて) ああ、えっと、教授」
ワシリー「……」

エルマー「文化人気取りでお高く止まってやがるがなあ、お前らにドイツ文化芸術の何がわかるってんだ。俺が教えてやるって言うってんだよ」

アロン「……」
エルマー「なんだこれ。お前、頭おかしいんじゃないのか？ あんたに必要なのは絵の先生じゃなくてこっち(頭)の先生みたいだな。なんだ？ ウイーンは俺たちの街なんだよ。文句があるならさっさと巢に帰れよ！」

板垣「やっぱりこんなのおかしいよ……」

朝利「おい板垣」

板垣「二人はなんとも思わないの?!」

僚太「そうだけど……」

アドルフ「うるさいな」

エルマー「あ?」

アドルフ「演説なら他所でやれよ。そんなにベラベラ喋られたら創作に集中できない」

僚太「アドルフ?」

アドルフ「だいたいあんたさつきからユダヤ人の悪口ばっかでまともな批評してないじゃないか」

エルマー「なんだと?!」

アドルフ「結論ありきの、批判のための批判だ。そんなものに耳を傾ける必要なんてない」

アロン「アドルフ……」

アドルフ「(僚太に) そうだよな」

僚太「そ、そうだ！ アドルフの言う通りだ！！」

朝利「お、お、お」

板垣「そうだよ！」

エルマー「な、なんだよ」

アドルフ「ここは芸術家の交流の場なんだ。ユダヤ人だとか、日本人だとかそういうレベルでしか芸術を理解しない素人の出る幕じゃない！ 邪魔するなら出て行ってくれないか！」

板垣「アドルフ！ すごいぞ！！ お前やればできるじゃないか！！！！」

朝利「板垣って熱血教師タイプだったんだ……」

アドルフ「え、なに」

板垣「あ、ごめん」

エルマー「出て行って、ここは俺の家だぞ?!」

シュテファニー「ろくにお金も入れないでなに言ってるのよ」

エルマー「なんだよお前まで!!」

アドルフ「確かにアロンの絵は子供がふざけて描いたようなものだが、僕くらいの人間が見ればそれなりに理解できるところもある。ミレイのロマン主義への憧憬を感じさせながら、印象派の影響も見える。人物表現はまあ、悲惨だが、認識への新たな試みと言えなくもない。女性の視線の暗さは象徴主義的で……」

僚太「アドルフ？」

アドルフ「……」

アドルフもついに、アロンの才能に気づいてしまう。

アドルフ「なんだこんなもの。忌まわしい……！」

アドルフ、スケッチを床に叩きつける。

アロンそれをひろう。

僚太「アドルフ！」

アドルフ「……まあ、ことほどさように？ 批評というのはこのくらいの精度であって然るべきだ。無職は引っ込んでろ！」

エルマー「そりゃねえだろ！ 俺はお前のためにこいつを追い出そうとしてんだぞ?!」

そうっすよねえ?! 教授」

ワシリ「……（顔を逸らす）」

アドルフ「俺のため？」

エルマー「こいつを国に追い返せば、その分の推薦枠にお前が入れるって言うからさあ！

俺は！ だいたいなんだよ、お前ら（僚太たち）まで一緒になって俺を責めやがっ

て!!! そもそもこいつを追い出すのはお前らの仕事だろ?!」

アロン「え？」

エルマー「それをお前らが不甲斐ないから、俺がその役を引き受けてやったんじゃないか！！」

アロン「僕を追い返そうとしてたんですか……？」

僚太「いや、違うんだよそうじゃなくて」

板垣「俺はそういうのはよくないって言うつもりだったんだけど」

朝利「お前、それはずるくないか？」

アドルフ「推薦枠ってなんだよ」

アロン「僕は知りません！ 父親が勝手に！」

アドルフ「賄賂を渡したんだな？ ユダヤ人らしいやり方だよ、卑怯者め！」

アロン「卑怯なものにも、僕の推薦枠は君がとっちゃったじゃないか！」

アドルフ「俺はそんなものいらない！！」

アロン「僕だっていません！」

アドルフ（僚太達に）おまえらなに考えてる？！」

僚太「違うんだって！ だって教授が！」

アロン「教授……」

ワシリー「いやだな、私は彼らに、ヒトラー君のことをくれぐれもよろしくと伝えただけさ」

板垣「えー！」

ワシリー「人を指さすのはよしなさい」

アドルフ「お前らがユダヤ人に抱え込まれてるのはわかってる。俺はなあ、金に物言わせてデカイツラしてるユダヤ人も嫌いだが、そういうユダヤ人にすり寄るドイツ民族はもっと嫌いだ！ お前らみたいなのがこの国をだめにしてるんだよ！」

ワシリー「ずいぶんな物言いだね。同じドイツ民族だからこそ。才能のない君にも手を差

し伸べてやったというのに」

アドルフ「才能がない？」

ワシリー「君だって今理解したろ。自分とアロン君の差を」

アドルフ「俺はあんな絵評価してない……。あんなものは退廃芸術だ！」

ワシリー「よく考えてみたまえ。なぜ彼らが、アロン君を追い返そうとしたのか」

アドルフ「……」

ワシリー「そうでもしなきゃ、君はアカデミーに受からないってわかっていたからさ」

僚太「アドルフ」

アドルフ「……なるほど。俺が画家になるってのは、そういうことだったのか。よく分かった！」

アドルフ、部屋に駆け上がっていく。

僚太「アドルフ！」

アドルフ（声）「うるさい！ お前の下手くそなピアノはもううんざりだー！」
アウグスト（声）「なんだよー！」

階上からは扉を叩く音。

アウグスト（声）「ドルフィー！ ちょっとどうしたの？ 開けてよ！ ドルフィー！」

アウグスト、顔を出し、

アウグスト「ねえ、どうしたの?!」

僚太「……」

ワシリー「さて、そろそろお暇しようかな。若者達の貴重な時間をこれ以上奪うのはよくない。エルマー君、君もきたまえ。少し相談したいことがあるからね」

エルマー「あ、はあ……」

ワシリー「失礼」

ワシリー、エルマー出ていく。

アロン、無言で画材を片付けはじめる。

板垣「アロン」

アロン「追い返すって、どこに？ 僕たちに帰る国なんてない！ 信仰も捨てた。文化も、言葉だって捨てた。それでも貴方たちは僕らのことを仲間だとは思ってくれない！ じゃあ僕たちはどこで生きていけばいいんですか！」

アロンも部屋に戻ってしまう。

シユテファニー「なにしてんの、あんた達」

僚太、朝利、板垣、返す言葉もない。

マリアがやってきて、

マリア「ちょっとうるさいわよ！！ ……てあら、静かだわ。あ、クビツェクさんようやく出てきた。あなたにほら手紙」

アウグスト「僕にですか？」

アウグスト、手紙を開ける。

マリア「シユテファニー、すんだならレンジの煤払ってちょうだい」

シュテファニー「……」

シュテファニー、マリア上手にさる。

アウグスト「……ああ、僕リンツに帰らなきゃ」

僚太「なんで」

アウグスト「召集令状だ」

舞台全体にノイズが走る。

《街角》

夜。

道を歩くアドルフを待ち構えているワシリーとエルマー。

エルマー「よお」

アドルフ「(踵を返し)」

エルマー「待てよ。教授があんたに話があるってよ」

ワシリー「君に謝りたいんだよ。この間はあのユダヤ人のせいで私も少し冷静さを欠いて

いた。本来なら君とはもっと有益な話ができるはずなのに」

アドルフ「有益な話？」

ワシリー「君の才能について、少しばかり提案させてもらっていいかね」

アドルフ、ワシリーたちと共に去る。

《下宿》

僚太、朝利、板垣がうなだれている。

板垣「アドルフ、ここどころ全然描いてないよね」

朝利「グストルの話じゃ、朝から晩まで本ばっか読んでるって」

板垣「ツアクライス夫人によると、エルマーとパブに入り浸ってるって話だよ」

朝利「アドルフってこの後どうなるんだっけ？」

板垣「確か、グストルが兵役に行ってる間に失踪する」

朝利「失踪?!」

板垣「それで、もうグストルとは会えなくなつて……、二回目の受験にも失敗する……」

朝利「確実にそっちのコース進んじゃってるな」

板垣「ねえ、これ、俺たちのせいで状況悪化してない？」

僚太「え？」

アロンが無言で通り過ぎる。

板垣「アロンも口きいてくれないしさ……」

朝利「どうする、僚太」

板垣「……もうこんなこと、やめたほうがいいんじゃないのかな」

僚太「はあ？」

板垣「だってき、やっぱなんか無理あるよ。もし仮にアドルフがアカデミーに合格できたとして、そしたら絶対に画家になれるの？」

僚太「……」

板垣「俺たちがいい例じゃん。三人とも美大に入ったけど、俺は教師になるし、朝利はプロダクトデザイナーになるし、僚太なんかまだどうするか決めてもないじゃんか。俺はあいつに画家としてやっていけるだけの才能があるとは思わない」

僚太「そんなのまだ分かんないだろ！ だいたい、才能才能っていうけどさ、才能ってなに。才能ってそんなに簡単にあるとかないとか言えるもんじゃないから。ゴッホだって、モディリアーニだって、死んでから評価されてるし、アンリ・ルソーだって、印象派がなかったらただのヘタなお絵かき好きのおっさんとして一生終わってた。外野が知った顔して才能あるとかないとか、画家としてやってけるとかやっつけてけないとかなんていえんだよ?!」

板垣「歴史が証明してるだろ！」

僚太「だからそれを変えてやろうっていつてんの！」

板垣「だからそれをやっちゃいけないんじゃないかって言ってるの」

僚太「なんで」

板垣「だって、俺たちこの時代の人間じゃないんだよ？ よそ者が来て、ひと1人の運命を操作しようなんて許されないんじゃないの……?」

僚太「1人の運命じゃない。六〇〇万人以上のユダヤ人の運命だ」

板垣「その言い方はずるいよ」

僚太「なにが」

板垣「だってお前、ほんとはユダヤ人のことなんてどうでもいいじゃん」

僚太「……」

板垣「卒制のために、アドルフを画家にしたいだけだろ」

僚太「……そんなことない。俺はアロンのことだって心配してるし。ユダヤ人虐殺だって止めたいし」

板垣「じゃなきゃテーマがぶれるもんな」

僚太「……俺は世界を変える作品を描かなきゃいけないんだ」

板垣「なんで？」

僚太「そうでもしなきゃ、親父は俺のこと認めてくれないから」

板垣「親父さんがお前を認めることと、お前が画家になることは、何の関係も無いだろ」

僚太「……今の美術界じゃああの人が値段をつけない作品は、評価の対象にすらならない。親父に認められないってことは、画家としてはやっていけないってことなんだよ！」

僚太、駆け出す。

板垣「どこいくの！」

僚太「アドルフ探してくる」

僚太、出て行ってしまふ。

板垣「なに黙ってんの」

朝利「……」

朝利「あいつには画家になってもらわなきゃ困る」

板垣「だけどアドルフが画家になれるかどうかなんて」

朝利「いや、アドルフじゃなくて、僚太の話」

板垣「え？」

朝利「俺さ、美大入るまでずっと、自分は画家になるって信じてたんだよね。でもさ、2

年の時、自画像の課題出たの覚えてる？」

板垣「うん……」

朝利「あの時の僚太の作品見て、今まで自分が信じてきたものがなんて弱っちいんだって
思い知った」

板垣「……」

朝利「俺さ、美大って、原石の集まりだと思ってたんだよ。そこでみんなが磨かれて、みんなが宝石になっていくんだって。でも違うんだよね。そこで磨かれるのはたったひとつの原石なんだよ。俺は原石じゃなくて石だった。原石を磨き上げるために存在している石。あいつの絵を見て、それがわかっちゃったんだよねー。わかったときには、俺もう丸く摩擦してた。だから、あいつが絵をやめるのだけは、ぜってー許さねえ。俺の人生を削った分、生き延びてもらわないと。あいつを画家にするためなら、俺なんだってやるよ」

板垣「……」

と、シュテファニーが奥の廊下から顔を出す。

シュテファニー「六〇〇万人のユダヤ人が、なに……？」

板垣「シュテファ……」

シュテファニー「歴史とかなんとか……あんたたちなんの話してんの……？」

朝利「いや、なんでもない。ちょっと課題の話してただけ」

シュテファニー「それってこの絵に関係あったりする？」

シュテファニー、ポケットから僚太の描き損じを手折りだしてみせる。

そこには現在のアドルフと、未来のアドルフ・ヒトラーが並んで描かれている。

板垣「それ……！」

シュテファニー「僚太が描いてたの。こっちはアドルフよね。じゃあこっちのちょびひげの男は……大人になったアドルフ……？ よね。どうして？ どうして大人になったアドルフなんて描くの？」

朝利「そりゃ、芸術家の考えることは突拍子もないから」

シュテファニー「はじめて見たときからおかしいと思ってたのよ。日本人がわざわざこんなところまで来るなんて。アドルフのために。どうして？ 彼はなんなの？ あんたたちは彼のなにを知ってるの？」

板垣「……」

シュテファニー「あんたたち……スパイなんでしょ!!」

板垣「違う!」

朝利「そう来たか!」

シュテファニー「通報しなきゃ」

板垣「いやいや」

シュテファニー「アドルフもグルね?! 全員まとめてぶち込んでやるわ!」

板垣「やめてやめてやめて」

シュテファニー階段の上に駆け上がると、

シュテファニー「近づかないで、触らないで! それ以上近づいたらこれぶち壊すわよ!」

シュテファニー、板垣の携帯を掲げる。

板垣「俺のスマホ!! いつの間に!!」

シュテファニー「シート交換の時にね」

板垣「あ、あ、あ」

朝利「肌身離さず持つとけよ!」

板垣「隠しといた方がいいと思って!」

シュテファニー「コレであんたたちが日本と連絡取り合ってるのはわかってるわ!」

朝利「だいたいあってる!」

シュテファニー「やっぱりスパイなのね?!」

板垣「そうじゃなくて!」

シュテファニー「(スマホをこねくり回しながら) どういう仕組みなの、これ?」

朝利「おい落とすなよ?!」

板垣「確かに日本とは連絡取り合ってるけどスパイとかじゃないから!」

シュテファニー「じゃあなんなの?!」

板垣「……」

シュテファニー「……」

シュテファニー、スマホを床に投げつけようとする。

朝利・板垣「わああああ!!」

シュテファニー「(止まる)」

板垣「だから、ただの日本の美大生だって……」
シュテファニー「……」

シュテファニー、スマホを床に投げつけようとする。

板垣「アドルフを画家にするために来たんだって！本当にそれだけ！！」

シュテファニー「……どうしてあいつばかり特別扱いなの？」

板垣「それは……」

シュテファニー「アロンだって頑張ってるのに！」

シュテファニー、再びスマホを振り上げる。

朝利「アドルフを画家にしなきゃアロンが殺されるからだよ！」

シュテファニー「は？」

板垣「朝利？」

朝利「俺たちね、一五年後の未来からきたわけ」

板垣「それ言っちゃっていいやつ?!」

朝利「俺なんかもーこっち(シュテファニー)にまで氣い回す余裕ないわー」

シュテファニー「なによ」

朝利「はい。俺たちは一五年後の未来の美大生です。アドルフは美術アカデミーに落ちるとそのあと独裁者になって、ヨーロッパ中のユダヤ人を大虐殺します。俺たちはそうならないようにアドルフがアカデミーに合格できるようサポートしているのです。はい。これで全部。早くそれ返してくれる？」

シュテファニー「未来？ 何言ってるの？」

板垣「そうだよ。そうなるよね。(朝利に) そうなるよ！」

朝利「これ以上なんて言えばいいわけ？」

シュテファニー「馬鹿にしないでよ！(スマホ振り上げるので)」

板垣「してないしてない！ 馬鹿にしてないから！！ スマホ見てみてよ！！」

シュテファニー「スマホ？」

板垣「それ、持ってるやつ」

朝利「未来の通信機器」

シュテファニー「未来の……？ ただの板じゃない」

板垣「電源電源。その、親指のところにある出っ張り長押しして」

シュテファニー「長押し……？」

板垣「しばらく押し込み続けて」

シュテファニー「眩しい！！ 光ってるわ！！ この板、光る板だわ！！」

板垣「パスワードは設定してないから。方位磁石のマークを触って」

シュテファニー、しばしスマホをいじくり回すと、

シュテファニー「……この板、直感的に操作できる！」

朝利「やっぱステイブジョブズってすげーんだなあ！」

シュテファニー「ほんとに、未来の機械なのね……」

朝利「そこに、これから先起こることが書いてある」

シュテファニー、スマホを覗き込む。

《高台》

高台ではアドルフが街を見下ろしている。

そこにアウグストがやってくる。

アウグスト「やっぱりここにいた」

アドルフ「……」

アウグスト「最近、描いてないね」

アドルフ「……」

アウグスト「受験勉強は、もういいの？」

アドルフ「……」

アウグスト「ドルフィ、あのね、僕君に話があつて……」

アドルフ「俺、見誤つてたのかもしれない」

アウグスト「ん？」

アドルフ「自分の才能を」

《パブ》

階下ではワシリーとエルマーがパブでアドルフを囲むようにして話す。(アドルフはそこにいる設定で)

高台のアドルフは、アウグストに向かって話している。

ワシリー「君にはもっと別の才能があるかもしれないと思ってね。例えば建築家とか」

アドルフ「確かに去年試験官に、画家よりも建築家に向いてると言われた。でもあれは不

合格にするための体のいい言い訳だと思ってた。でもそうじゃない」

ワシリー「ヒトラー君。もっと自分に自信を持ちたまえ。たしかに君は人物画が描けな

い。だが君の建物の絵は絶品だ。我々教授陣が満場一致で太鼓判を押すくらいさ」

アドルフ「満場一致だって！」

ワシリー「もちろんそうだと。君は立派な建築家になるはずだ。だからこそ私たちはア

カデミーの門を閉ざしたんだ」

アドルフ「アカデミーは俺を建築家にするためにあえて落としたのさ！」
アウグスト「え、じゃあ君、画家はやめて建築家になるの？ でも君、」
アドルフ「そう。俺は実科学校を中退してるから、建築科は受験できない。そう言ったんだ。そしたら」

ワシリーとエルマー、顔を見合わせニッコリ。

エルマー「そうだと思ってよ。それで提案があるってーの」

ワシリー「君の建築家的視点を十二分に生かし、かつドイツ民族に力を与える職業があるんだ」

エルマー「政治家だよ」

アウグスト「政治家？」

アドルフ「そうだ！ どうして今まで気が付かなかったんだろう」

ワシリー「政治家になれば、街中を君の思うように作り替えることができる。君の頭の中にある芸術的世界を現実に取り上げることができるんだ」

アドルフ「政治家になったら、まずはリンツの改造から始めよう！ 君と僕の故郷だ！」

アドルフの脳内イメージが舞台に映し出されていく。

アドルフ「緩やかな丘陵地帯にドナウ川が蛇行し、夏には夏の光を、冬には冬の光を反射して輝いている。見ろ！ グストル！ 美しいだろう？」

アウグスト「う、うん」

アドルフ「でも完璧じゃない。川沿いに立つ市役所と銀行。まずはあれを取り壊す。あれらのせいで対岸にある丘への視界が遮られるからな！ そこは大きな広場にして、ドナウ橋へまっすぐ行けるようにするんだ。旧市街の古城は博物館にして、新しい市役所は近代様式で建てる。忌々しい線路は全て地下へ埋めてしまおう！」

アウグスト「線路を地下へ?!」

アドルフ「地下鉄だよ！ 線路をどかした跡地には、子どもたちが遊べる遊具をたくさん置くんだ」

アウグスト「すごいよドルフィ！」

アドルフ「駅は町の南に移動して、そこから南北を横断するメインストリートが延びる。その先にあるのは巨大なドーム状の神殿だ。ここはドイツ民族の祈りの場でもあり、政治討論するための集会場でもある。神殿の隣には音楽ホールを作るよ！ 素晴らしい舞台機構に華麗に飾り付けられた観客席。世界中の音楽家がこのホールで演奏することを望むだろう。でも、その舞台に立つのは君だ。君は芸術監督になってワーグナーのオペラを指揮する。俺は栈敷であの子に君のことを話す。彼はグストル、俺と青春を共に過ごした親友で、天才音楽家だって！ そして、街を見下ろす高台にあるのが君と俺の屋敷だ」

アウグスト「僕ら2人で暮らすの？」

アドルフ「玄関ホールには君のピアノ。左手側が僕のスペースだ。世界中の名画と山ほどの本。屋敷の一番日当たりのいいところを君のサロンにする。ここでは毎日君の楽団員が音楽を奏でるから、俺はもう立ち見席の列にわざわざ並ばなくてもいい。完璧だろ?!」

アウグスト「そりゃそうならたら素敵だなんて思うけど……。こんな壮大な計画、どうやって実現するんだよ」

パブでは、

ワシリー「ルエーガー市長ももう歳だ。彼がこの世を去ったらどうなると思う。ユダヤ人もがさらに幅をきかせ、ウィーンはドイツ人の街ではなくなってしまう。そうならなために、我々はフランツ皇帝を政治の舞台から引きずり下ろし、ドイツ民族のドイツ民族によるドイツ民族のための政治を実現させるべく活動していくつもりだ。君と私は芸術を愛する同志だ。そして我々が打倒すべき敵は同じ。我々と共に闘わないかね」

アドルフ「世界中のドイツ民族の力を集結させるんだ」

ワシリー「我々が、こんなに貧しいのは誰のせいだ」

エルマー「ハプスブルク王家のせいだ……」

ワシリー「その通り! 過去と現在において恥ずべき自己の利益のために、常に繰り返しドイツ民族の利益を裏切ってきたのは誰だ!」

エルマー「ハプスブルク王家だ!」

ワシリー「このような憂き目に遭って、一体誰がまだ皇帝への忠誠を保持していられようか!!!」

エルマー「そうだ!!!」

ワシリー「今こそ王家を打倒し、その恩恵にぶら下がるユダヤ人達をオーストリアからおいだすのだ!」

アドルフ「この計画は、大ドイツ帝国のもとで実現されるんだ!」

周囲の酔客から拍手が巻き起こる。

酔客、『ドイツ人の歌』を歌いはじめる。

ドイツドイツ 全てに勝れ

この世の全ての上に立て

護るにありて攻めるにありて

同胞(はらから)ごとく団結せよ

マーズからメーメルまでも

エチユからベルトまで

ドイツドイツ ひとつたれ

この世の全ての上に立て

パプに飛び込んできて酔客をかき分け、アドルフを探す僚太。
酔客の中に、東吾の幻影を見る。

僚太「父さん……？」

東吾「今は一億総芸術家時代。需要に対して明らかに供給過多だ。今必要なのは、あまたの芸術家達を正しく評価できる目なんだよ。お前にはその目がある。その目を持つものが、芸術の価値を決める。価値が決まって初めて、大衆はそれを商品として認識できる」

僚太「俺には画家の才能がないっていつてんの？ だから画商になれって？」

東吾「僚太。才能ってものはな、社会に必要とされてはじめて存在する。お前一人がどれだけ自分の才能を信じたところで、必要とされなければ、それは存在しないのと同じなんだ。僚太、自分が必要とされる場所で生きなさい」

アドルフ「俺は、俺の才能が求められる場所によく出会ったんだ！」

東吾、酔客達と共に消える。

高台のアドルフとアウグストも去る。

取り残される僚太。

《下宿》

シュテファニー「これ、全部……アドルフが命令してやらせるってこと……？」

朝利「そう。だから、俺たちはアロンを追い返して、アドルフをアカデミーに合格させようとしたって訳」

シュテファニー「六〇〇万人のユダヤ人のために、アロンは犠牲にならなきゃいけないってこと……？」

朝利「可哀想だと思うけど、たった一人の夢と六〇〇万人の命なら、六〇〇万人の命のほうが重いだろ」

板垣「俺はもう、よくわかんないよ……」

朝利「夢を諦めたって、死ぬわけじゃない」

アロンがやってくる。

シュテファニー「アロン」

アロン「夫人は？」

シュテファニー「買い物に……」

アロン「そうですか」

シュテファニー「何か用？ 伝えておくわ」

アロン「ポーランドに帰ろうと思って。下宿代の話を」
板垣「え？」

アロン「あ、君たちの分はちゃんと置いていきますから」
板垣「いやそういうことじゃなくて……」

アロン「ウィーンにこだわらなくても、絵はどこでも描けるし」

朝利「それがいいよ」

シュテファニー「だめよそんなの！」

アロン「アドルフの近くに僕がいることは、きつと彼にとって良くないことでしょうし」
シュテファニー「あいつのことなんて気にしないでいいじゃない！」

アロン「彼は弱い人だから、誰かが親切にしてあげないと」

板垣「アロン……」

シュテファニー「……でも、あいつのためにアロンが夢を諦めるなんて絶対おかしい」

朝利「もういいだろ。アロンの意思を尊重しようぜ」

シュテファニー「アロンは追い出されるのよ、あんたたちに！それが彼の意志?!」

朝利「いいんだよこれで全部丸く収まるんだから！」

シュテファニー「丸く収めるなら!!……もつと簡単な方法があるじゃない」

朝利「はあ？」

シュテファニー「(目を逸らし)……なんでもない」

アロン去る。

《街角》

力なくベンチに腰掛ける僚太のもとに、アウグストがやってくる。

僚太「アドルフは？」

アウグスト「またパブに行くんだって。僕は追い返されちゃった」

僚太「兵役のこと言ったか？」

アウグスト「ううん。なんだかそんな雰囲気じゃなくて」

僚太「そう……」

アウグスト「大丈夫かな」

僚太「え？」

アウグスト「ドルフィ。本当にこのまま、絵を辞めるつもりなのかな。彼が子どもの頃から大切にしてきたものって、もう絵しかないんだよ。それなのにそれを手放しちゃったら、彼もう、どこにも寄る方がなくなっちゃうんじゃないのかな」

僚太「本当にあいつのこと友達だと思ってんだ……」

アウグスト「そりゃそうだよ！でも。今は彼のこと、すごく遠くに感じる。このままどこかに行っちゃうんじゃないかなって」

僚太「俺さ、難しいことよく分かんないんだけど……」

アウグスト「ん？」

僚太「今はただ、アドルフに絵をやめて欲しくないって思う……」

アウグスト「僚太、僕ちょっと考えてることがあって……」

僚太「なに？」

アウグスト「ドルフィに絵を辞めさせない方法！」

舞台、そのまま下宿になる。

アウグストを囲む、僚太、朝利、板垣。

アウグスト「シユテファニーに、モデルになってもらうんだよ！」

シユテファニー「もうなってる」

アウグスト「君じゃなくて、リンツの！」

板垣「ん？ ん？」

アウグスト「ドルフィの想い人の！」

板垣「あ、ああ〜！」

アウグスト「彼女くらいのお金持ちなら、多分そろそろ肖像画の一枚や二枚、画家に依頼する頃合いだと思うんだよね」

朝利「そういうもんなんだ」

アウグスト「それを……ドルフィに依頼してもらうんだ。さすがのドルフィも、彼女のお願いなら断らないはずだよ！」

朝利「うん。(よく分からなくて)……うん？」

僚太「そうになったら、アドルフは人物画を必死で練習するしかない！」

朝利「おお〜！」

板垣「ん？ ん？」

朝利「好きな女の子の絵を描くために一生懸命練習する。練習すればうまくなる。うまくなれば、受験も成功！」

僚太「ああいうタイプは、漠然と受験のための絵を練習させてもだめなんだよ。描きたいもののために練習させる。そういうときの集中力、アドルフはすごいんだろ？」

アウグスト「間違いないよ！」

板垣「それってつまり……」

僚太「アドルフには、実力で受験に挑んでもらう！」

板垣「アロンは？」

僚太「犠牲にしない！」

板垣「そういうことなら、のった！」

と、奥から、すっかり荷支度をしたアロンが出てくる。

シユテファニー「アロン……」

アロン「……」

僚太「(アロンに) この間はごめん。あれは俺たちが勝手にやったことで、アドルフはなにも関わってないから！」

アロン「それはわかっていますが……」

僚太「本当にすいませんでした！ 俺たちが、馬鹿でした！」

朝利「わるかった」

板垣「本当にごめんなさい！」

僚太「だから、アロンはなにも気にせず、アカデミーを受けて欲しい」

シュテファニー「そうよ！　そうすべき」

アロン「……だけど、本当にいいんですか？　皆さんはアドルフを合格させないといけな
いんじゃない」

僚太「大丈夫。アロンがどれだけ絵がうまくても、それに関係なくアドルフが合格できる
よう、俺たちが全力でサポートするから！　なあ？」

板垣「うん！　てかもともとそのつもりだったよね！」

シュテファニー「アロン、あなただって人に親切にしてもらうべきだわ」

アロン「もう充分、して載っています」

シュテファニー「アカデミーに合格したらうちから通って」

アロン「それは……きつと楽しいでしょうね」

アロン、シュテファニー、ニコニコ。

僚太達それを察し、ん？　ん？　ん？　と首を傾げる。

アロン「でも、彼にどうやって絵の練習をさせるんです？」

シュテファニー「アドルフの好きな女の子にモデルになってもらうんですって」

アロン「ああ、それはきつと効果覲面ですね」

シュテファニー「アロンもそう思う？」

アロン「僕にも思い当たる節がありますから」

シュテファニー「そうなんだ」

再び、アロンとシュテファニー見つめあってニコニコ。

板垣「あれ？　なんか二人、あれ？」

アウグスト「すごい……。ドルフィはアカデミーに合格するだけじゃなくて、好きな女の
子ともお近づきになれるんだ！」

男子達、おおと歓声を上げる。

アロン「あ、でもその彼女に、どうやってモデルをお願いするんですか？」

アウグスト「僕、今度徴兵検査でちょっとだけリンツに帰るんだ。その時にお願ひしてみ
るよ」

僚太「ツテがあるんだよな？」

アウグスト「うん。僕の知り合いのチェリストが、彼女のお兄さんの友達、の友達なんだ
よ」

板垣「とおくない？」

アロン「いえ、お兄さんから攻略するのはかなりいい筋だと思います」

朝利「そういうもんなんだ」

アウグスト「それに、僕だってもう、ただのリンツの家具職人のせがれじゃない。れつきとしたウイーンのビオラ奏者だからね。きっと話を聞いてくれるはずだよ」

アロン「そうだと思います」

僚太「よっしゃ！」

アウグスト「こんな風にドルフィのことを心配してくれる人がたくさんいるなんて。信じられないよ……」

朝利「お前、ずっと一人でアドルフのお守りしてたんだもんなあ」

アウグスト「これで僕も安心して兵役に行ける」

板垣「アドルフにはもう伝えた？」

アウグスト「うん。今は自分のことに集中してほしいし」

板垣「そっか」

僚太「じゃあ、頼んだぞ！ グストル！」

アウグスト「うん！」

人々の動きで時間経過を表す。

アウグスト、一度部屋に戻り、荷物を持って玄関からでていく。

アドルフ、怪訝な顔をしてアウグストを見送る。

僚太達は笑顔で見送る。

僚太「え?! シュテファニーにタイムスリップのことがばれた?!」

板垣「うん、なんか、いろいろあって……」

僚太「それで？」

朝利「たぶん、アロンのために協力してくれてる? っぽいけど……?」

アロンは、シュテファニーをモデルにして絵を描いている。

マリアは、掃除をしに出てきて、シュテファニーにも家事を手伝うよう叱責。

シュテファニー、マリアと交代して掃除をはじめ。

マリアはマリアで、洗濯物を運んだり。

シュテファニーに変わって、朝利がアロンのモデルになってやる。

エルマーがやってきて、アドルフの部屋へ。

それを不安げに見る僚太、スケッチブックを持ってはくるが思うようにはかどらない。

それに気づいた、朝利、板垣、アロン、僚太のまわりに集まってくる。

4人であだこうだいつている。

その様子を2階の窓から静かに見下ろしているアドルフ。

僚太、それに気づいて声をかけようとするが、アドルフは部屋に戻ってしまう。
マリアに頼まれ買い物に出かけるシュテファニー。

そして数日が経ち……

アウグスト、帰ってくる。

僚太「どうだった?!」

アウグスト「とりあえず、シュテファニーのお兄さんには会えた!」

朝利「それで?!」

アウグスト「ドルフィのことめっちゃくちゃ売り込んでおいたよ!」

僚太「それで?」

アウグスト「今年の秋にウィーン美術アカデミーに入学する予定で、将来は偉大な芸術家になる事間違いないって!」

僚太「うん、それで?」

アウグスト「妹の肖像画を描かせるのに今もつともふさわしいのは、アドルフ・ヒトラー以外にはいないって!」

僚太「それで?」

アウグスト「あ、お金は要りません、とも言っておいたよ?」

僚太「わかったから! それでどうなったんだよ!」

アウグスト「……検討するって」

朝利「検討かぁー!」

板垣「検討……検討ねえ……」

アウグスト「不味いかなあ?」

僚太「検討……」

板垣「検討って、日本で言うとその……」

朝利「少し時間をおいてから断ります、って意味だから」

アロン「ポーランドでもそうです」

アウグスト「ウィーンでもそうだぁ……」

朝利「まあそっか……」

アウグスト「ああくやっぱりダメだったのかなあ。ドルフィは?」

朝利「相変わらずエルマーとつるんでコソコソやってるよ」

アウグスト「絵は描いてない?」

僚太「多分……」

と、シュテファニーが荷物を抱えて買い物から帰ってくる。

シュテファニー「あ、お帰りなさい!」

アウグスト「ただいま! (シュテファニーに) あ、お帰りなさい」

シュテファニー「ただいま(笑)」

アロン「手伝いますよ」
シュテファニー「ありがとうございます。それで、どうだったの？」
アウグスト「検討しますって言われちゃった」
シュテファニー「改めて連絡が来るってこと？」
板垣「だったらいいけどね……」
シュテファニー「それってもしかして……」

シュテファニー、ポケットから手紙を取り出す。

僚太「それ！」
シュテファニー「今そこで受け取ったの。アウグスト・クビツェク宛。シュテファニー・ラバッチュより」

歓声上がる。

アウグスト、手紙を受け取ると、皆そのまわりに集まる。

アウグスト「ちかいちかい、見えない見えない」

手紙を開いてみるが、

板垣「読めない！」
アウグスト「えーと……」
僚太「なんだって？　なんて書いてあるの?!」
アウグスト「アウグスト・クビツェク様。兄から、あなたの友人が、私の肖像画を描いてくださると聞きました。もしよければ……お願いできますでしょうか！」

歓声上がる。

アウグスト「これは……大変だ！」
僚太「アドルフ！　アドルフ！」
アウグスト「ドルファイ！」
朝利「アドルフ！」
板垣「アドルフ！」

皆口々にアドルフの名前を呼ぶ。

アドルフ2階から顔を出し、

アドルフ「うるさいな！」

アウグスト「ドルフィ！」

アドルフ「ああ、グストル。帰ってきてたのか。ご両親は健在だったか？」

アウグスト「うん。相変わらず君のこと心配してた」

アドルフ「そう。君は？ 病院に行くって言ってたけど身体のほうは……」

アウグスト「(遮って) 大丈夫大丈夫！ いいんだよ僕の話は！ それより、君に手紙が来てる」

アドルフ「俺に？」

アウグスト「君の運命を変えるかもしれない手紙！」

ノイズが走る。

一九〇八年の人々、ストップ。

二階から鷺塚と藍島が出てくる。

一九〇八年の人々と、現代の人々が舞台上に同時に存在する。

鷺塚「なにももう忙しいんだけど」

藍島「いやなんかさ、何かへんなんだよね」

鷺塚「なにが」

藍島「いや、アトリエがさ。こんなところに、絵、飾ってあったっけ？」

鷺塚「あったよ(戻ろうとする)」

藍島「ええ？ そうだっけ？」

鷺塚「あれ……？ ソファアってこんなところにあっただっけ？」

藍島「ソファアはそうだよ、初めからここにあっただけど」

鷺塚「そうだった？」

藍島「それよりこのベンチって、もつとこっちになかった？」

鷺塚「ベンチは前からここに置いてあるって」

藍島「んん？ ……ほら、なんか変なのよ」

鷺塚「は？」

藍島「ものの位置が、変わってるような変わってないような。頭がなんか、ぐにゃあっとしてさ……」

鷺塚「(アトリエを注意深く見て) んー……？ (携帯を見て) ん？」

藍島「なに？」

鷺塚「これ、昨日ここで飲んでたときの写真なんだけどさ」

藍島「学校で飲むなよ」

鷺塚「あそこほれ、絵がない」

藍島「そうだよね！ やっぱアレなかったって！」

鷺塚「記憶の混線……？ マンデラエフェクト……？」

藍島「なに、なんて？」

鷺塚「タイムスリップが、現在の事象に影響を与えてる？ いやそんなはずないか……」

藍島「ワッシー？」

鷺塚「ちょっとあいつらに電話して？」

藍島「いいけど、多分電源切ってるよ？」

鷺塚「じゃあ電話しろってメールして」

藍島「わかったー」

鷺塚「キャラメルモカキャラメル増しのペンティーは？」

藍島「まだ買いにいけないけど」

鷺塚「じゃあ買ってきて」

藍島「はいはい。とりあえずメールしとくね？」

鷺塚「はい」

藍島去る。

鷺塚、考え込むも研究室に戻る。

一九〇八年の人々動き出す。

アドルフ「俺の運命を変えるかもしれない手紙？」
アウグスト「誰からだと思う？」

アドルフ、手紙を受け取りに行くが、アウグストはそれをスカす。

アドルフ「おい」
アウグスト「誰からだと思う？」
アドルフ「さっさと渡せ」

アウグスト、もう一度スカす。

僚太「誰からだと思う？」
朝利「誰からだと思う？」
板垣「誰からだと思う？」

アドルフ「なんだ気持ち悪いなニヤニヤして！ だいたい俺はもうお前たちとは口をきかないって決めたんだ！」

アウグスト「シユテファニーからだよ！」
アドルフ「シユテファニー？（シユテファニーを見るが）」
シユテファニー「は？」
アドルフ「は？」

アウグスト「こっちのシユテファニーじゃなくて、リンツのシユテファニー！ シユテファニー・ラバッチュ！」
アドルフ「！」

板垣「……止まってる」
アロン「止まってますね」
アドルフ「……なぜ？ なぜ彼女が僕に手紙を？」
アウグスト「君に、肖像画を描いてほしいって！！」

アドルフ、無言で歩き回る。

僚太「アドルフ？」
板垣「アドルフ？」
朝利「おい、アドルフー？」
アドルフ「ウソだ！」

皆口々に「嘘じゃない嘘じゃない」という。

アドルフ「だって、そんな、あり得ない！ 彼女が？ 僕に？ 肖像画を？！ そんなことが起こるはずはない！ だって俺は彼女と口を聞いたこともないのに！ お前達また俺を貶めようっていう、そういう」

僚太「今度は嘘じゃない！ もう、嘘はつかない！」

アドルフ「いや、いや！」

僚太「グストルだよ！ グストルが、彼女のお兄さんに掛け合ってくれたんだ！」

アドルフ「グストル？」

アウグスト「うん。ほら」

アドルフ、手紙を受け取るが正視できない。

ちよつと見ては視線を外し、を繰り返し、

アドルフ「これが彼女の字だ！ ……君の名前、君の名前が書いてある！」

アウグスト「そうだよ」

アドルフ「読み上げて）もしよろしければ……！（正視できず）」

アウグスト「ちゃんと読めてる？」

アドルフ「君が……話したのか。彼女の兄上と？」

アウグスト「うん」

アドルフ「どうして」

アウグスト「君が喜ぶかと思って」

アドルフ「……」

アウグスト「ドルファイ？」

アドルフ「余計なことしやがって！」

朝利「おい、」

アドルフ「彼女の兄上に声をかけた？ 君が？ 俺になんの断りも入れずに？！ 何を考えてるんだ！ ええ？ 彼女は神聖な存在なんだ！ 誰にも汚せない天上の女神だ！ 気安く触れれば汚れが移って彼女はたちまち地上へ落ちてしまう！ そういう存在なんだよ彼女は！ だから俺はいつも遠くから彼女を見守るに留めてたんだ！ それは彼女のために！ それを君、君は、彼女の兄上と話して、肖像画を、俺に手紙だと！」

アドルフ、グストルに抱きつく。

アドルフ「なんてことを！！ 君は馬鹿だ！！」

アウグスト「ああ、ごめんごめん」

朝利「グストルってほんとにすごいよなあ……」

アウグスト「もちろん、引き受けるよね？」

アドルフ、アウグストから勢いよく離れて、

アドルフ「……だめだ！」

アウグスト「え？」

アドルフ「俺はもう絵はやめるって決めたんだ」

朝利「おいおい」

アドルフ「忙しいんだよ！ ビラだって配らなきゃいけないし、集会場の下見もしなくちゃならない。夜はパブへ行って議論するんだ。新しい社会のより強固な制度設計について！ そのためには本だつてもっとたくさん読まないと」

僚太「そんなもんでもいいだろ？」

アドルフ「どうでもいいわけあるか！ お前にも見せてやりたいよ、あの熱気。パブ中の客が俺に熱い視線を向けていた。誰もが俺の演説に耳を傾け、万雷の拍手を送る。ドイツ民族を救うには俺みたいな若い才能が必要だつて、俺を褒め称えるんだ。お前がくれたような偽物の賛辞じゃない。本物の賛辞だ」

僚太「それは本当に悪かった！！」

アドルフ「あの連中は、俺を必要としてる。必要とされる場所で、必要とされる才能を發揮することが、人としての責務なんだよ」

僚太「親父と同じこと言ってる……」

アドルフ「俺は父さんとは違う！」

アウグスト「君はシュテファニーに必要とされてるじゃないか」

アドルフ「シュテファニー！（頭を抱える）やめろ！ その名前を口にするな！（シュ

テファニーに）お前も改名しろ！ エルザだ、今日からお前は！」

シュテファニー「馬鹿言わないで！」

アドルフ「ああ……シュテファニー……なぜ君はこうも俺の心を乱すんだ！ 君は悪魔なのか？」

朝利「いちいちおおげさなんだよなあ」

板垣「さっきは女神って言ってたのに」

アドルフ「（板垣に聞く）女神なのか？」

板垣「知らないよ」

アウグスト「女神女神」

アドルフ「適切なことを言うな！」

アロン「必要とされているかどうかって、そんなに大事なことですか？」

アドルフ「ユダヤ人は黙ってるろ！」

アウグスト「ドルファイ」

アロン「そう、それです。僕はユダヤ人です。だから、皆さんにとっては必要ない存在かもしれない」

シユテフアニー「そんなことない」

アロン「でも僕は、ここにいます。お前なんか必要ないって言われても、生きてるし。それがダメなことだとは思いません。ダメって言われても、生きてるんで。それは、しょうがないんですよ。僕、絵を描くのもそれと同じじゃないかと思って。僕は、誰も僕の絵を欲しがらなくても、多分描きます。だって描きたいから。好きなんです、絵を描くのが。君は好きじゃないんですか？」

アドルフ「……」

僚太「好きだ……」

アロン「あ、えーと、アドルフはどうですか？」

僚太「俺は絵を描くのが好きだ」

アロン「あ、はい」

板垣「僚太、今お前の話してないから」

僚太「アロン！ お前やっばすごいな！」

アロン「あ、ありがとうございます」

僚太「そうだよ！ 必要とかなんとかそんなの関係ないって！ 好きかどうか、やりたいかどうかだろ？」

アドルフ「……好きかどうかなんて、そういうレベルの話をしてるんじゃないんだ俺は。」

ドイツ民族とこの国家の行く末についての責任の話をしてるんだよ！」

アロン「そっちの方が大事だって言うなら、もう、絵はやめていいと思います」

板垣「ア、アロン……」

僚太「いや、こいつは絵を描くの、好きだって」

アドルフ「勝手なこと言うな！」

僚太「だって俺わかるんだもん」

アドルフ「……」

僚太「見る目あるから」

朝利「いや、それは俺でもわかるわ」

板垣「俺も」

アウグスト「僕は知ってたよ」

僚太「これ、悩むようなことか？」

アドルフ「だけど……」

僚太「ん？」

アドルフ「うまく描けなかったらどうする。彼女の期待に応えられなかったら？ こんなもの誰でもかける、つまらない絵っていわれたら……？ そうなったら俺の人生はおしまいだ」

僚太「それはさ、描くしかないんだよ。描いたら絶望して人生終わるかもしれない。だけど、描かなきゃずっと怖いままだよ」

アドルフ「……」

アウグスト「君ならできるよ、ドルフイ」

アドルフ「……どうすれば、あの子を美しく描ける？」
僚太「練習すんだよ！」

皆で絵を描く準備を始める。
準備をしながら、

板垣「モデルは？」

シュテファニー「私が」

アドルフ「ダメだ。あの子のイメージが穢れる」

シュテファニー「あんたねえ！」

朝利「じゃあ俺がなってやろうか」

僚太「いや、朝利は指導側にいてもらわなきゃ困る」

板垣「じゃあ俺もダメか」

アロン「僕もできれば描きたいです」

グストル「え、じゃあ僕？」

アドルフ「テンションがあげられない」

アウグスト「ひどいなあ」

僚太「……自画像だ」

アドルフ「自画像？」

僚太「鏡に映った自分を描くんだ。自分をモデルにすれば、どれだけじろじろ見ても、見
つめ返してくるのは自分だけだ。アドルフ。鏡に映った自分は、誰よりも画家に寄り添
ってくれる最高のモデルだぞ」

アロン「確かにそうですね」

朝利「いいじゃん、僚太の得意分野だし」

アドルフ「そうなのか？」

僚太「(思い出して) ああ、そうだったかも……」

板垣「鏡ってある？ できれば全身が入る大きいやつ」

シュテファニー「母さんの部屋に」

グストル「手伝うよ」

シュテファニー「お願い」

準備整い、舞台の中心に鏡に見立てた大きな枠が置かれる。

その前に座るアドルフ。

アドルフを中心に、僚太達あつまる。

その様子はさながら一枚の絵画のよう。

アロン「僕もいいですか？ 鏡」

アドルフ「勝手にしろ」

僚太達、アドルフの返答に顔を見合わせる。
シュテファニーだけその輪の中に入れず、離れたところから青年たちの姿を見つめている。

僚太「まずは全体を大きく捕らえる」

板垣「すぐに描き始めなくていいよ。まずはよく観察して」

朝利「完成形をイメージする……」

僚太「モデルが持つてる雰囲気を掴むんだ。丸いのか四角いのか。細いのか太いのか。なめらかなのかざらついているのか」

アドルフ「(アロンに) 見たまま描けばいいんだろ？」

僚太「そう。自分をよく見るんだ、アドルフ」

アドルフの集中が高まっていく。

それに触発されて、僚太もスケッチブックを開き、アドルフの後ろで描き始める。

僚太、夢中で書き進めていく。

その様子を見て満足げな朝利と板垣。

しばしの時間経過を表現して、

板垣「あ、そういえば、いつ彼女に会うか決まってるの？」

アドルフ「皇帝誕生日だ。彼女は母上とリンク通りパレードを見に来るそうだから、その後で会うことになっている」

アウグスト「場所は改めて伝えるって書いてあったね」

朝利「皇帝誕生日っていつ？」

アウグスト「八月一八日だよ」

板垣「八月一八日……？」

板垣、こっそりとみんなの輪から離れて、スマホの電源を入れる。

板垣「俺らの帰る日じゃん」

アウグスト「え、そうなの？」

アドルフ「……」

メール受信音。

板垣「僚太、朝利！」

僚太、朝利、板垣の元へ。
板垣、電話かける。
その他の人々は、それぞれ部屋に戻る。

○16・下宿／アトリエ

鷺塚、藍島出てくる。

鷺塚はキャラメルモカのペンティーを持っている。

藍島「ワッシー！ 電話かかってきた！」

板垣「あ、もしもし？」

鷺塚「あんた達そっちでなんかやってる??」

僚太「なんかかってなに」

鷺塚「なんかへんなこと。歴史に影響あたえるようなさ」

僚太「やってるけど……」

鷺塚「なにしてる」

僚太「アドルフを画家にしようと……」

藍島「だれ、アドルフって」

僚太「アドルフ・ヒトラー」

鷺塚「バ………（絶句）」

藍島「ワッシー？」

鷺塚「いますぐやめな！」

僚太「なんでだよ！ ようやくうまく行き始めたところなんだぞ?!」

鷺塚「こっちに帰ってこれなくなるよ?!」

板垣「え……」

鷺塚「いい？」

鷺塚の説明にあわせて、説明映像が映し出される。

鷺塚「時間って言うのは、こう、過去から未来に一直線上に流れてると思われがちだけど
そうじゃないの。過去・現在・未来、全ての時間が、同じ空間に同時に存在してる。何
枚も重なった紙みたいだね。あんた達はその紙に穴をあけることでタイムスリップして
るわけ。だから、もう一度穴を開ければこっちに戻ってこれる」

板垣「はい……」

鷺塚「でもそれは、あんたたちのいる時間が、私たちのいる時間と同じ空間に存在してい
ればの話だから」

僚太「ん？」

鷺塚「多少の過去改変であれば、こっちにある家具の位置が変わる、みたいな些細な干渉が起るだけでたいした問題にはならない。でも、もし、ヒトラーが独裁者じゃなくて画家になるような大きな過去改変が行われれば、あんた達のいる時間は、私たちがいる空間とは完全に引き離されちゃうの！ そうなったらどんだけこっちで穴を開けても、あんた達はこっちに戻ってこれない」

映像終わり。

板垣「やべーわかんねー」

鷺塚「ヒトラーを画家にしたら、あんた達は戻ってこれないってこと！！」

僚太「……」

鷺塚「いい？ もうヒトラーに干渉するのはやめなさい。あんた達はとにかく、タイムマシンが直るまで、なにもしないでジツとすること。目の前で何が起こっても手出ししないこと」

藍島「大人しくしてれば戻ってこれるってことだよね？」

鷺塚「うん。今こうやって通話できているってことは、こっちとそっちはまだ同じ空間にあるってことだから」

朝利「ん？ てことは、アドルフって、ここまでやってまだ独裁者になる可能性があるってこと？！」

鷺塚「あんた達がこれまでどれだけ歴史に干渉してきたかわからないけど、一度起こっている歴史には強力な必然性がある。全ての事象は、基本的にその必然性に向かって流れこむものなの。一度川ができたら、雨が降るたびに水はそこへ流れていくでしょ？ それと一緒に。だから、これ以上なにもしなければ、歴史はヒトラーが独裁者になる方向に向かって自然と動いていくはず。そしたら、あんた達は無事に戻ってこれる。わかった？」

僚太「……」

鷺塚「次のタイムスリップは予定通り、八月一八日の一七時に決行するからね。来た時と同じ場所にいるんだよ？ わかった？」

僚太「……」

藍島「僚太？！」

僚太「……」

鷺塚「そっちの時間で起こる問題は、そっちの時間の人達が自分たちで乗り越えなきゃいけないの。そういうことの積み重ねが今の私たちに繋がってるんだから。それをあんたらが引っかき回すってのは、人間の歴史に対する冒瀆だよ。わかった？！」

僚太「……わかった」

鷺塚「いま、電波何本立ってる？」

板垣「2本」

鷲塚「あつぶな……。いい？ こっちとそっちが同じ空間に存在してるか確かめるときは、携帯の電波状況見な。4本たったら問題ない。2本以下なら要注意。圏外になったらアウトだからね」

鷲塚、藍島、消える。

僚太、朝利、板垣、呆然と踊り場に座り込む。

朝利「いま、電池なんパー？」

板垣「二〇パー……」

朝利「あと一〇日か……。切っとけ切っとけ」

板垣「あ、うん……」

僚太「これ以上なにもしないって、なに？」

朝利「アドルフが画家になるような決定的な事象を引き起こさないようにするってこと？」

僚太「だってそんな、ここまで来て……」

板垣「だけど、アドルフが画家になったら、俺たち元の世界に戻れないって……」

朝利「僚太、スケブ、ある程度書き込めたんだよな」

僚太「……うん」

朝利「じゃあまあ、このまま帰ってもまあ、いいのか……？」

板垣「いやでも、それってそもそもアドルフを画家にするからこそ意味のある作品なんだ

よね……？ 歴史を変えたことを証明するために描いたんだから」

朝利「でもアドルフが画家になったら、そもそも俺たちが帰れないから、作品もクソもない……」

板垣「俺たちがしてきたこと、全部、意味なかったってこと……？」

沈黙。

僚太「んなわけあるか」

朝利「僚太？」

僚太「は？ こんなに苦労して？ 必死こいて？ 全部意味ない？ は？ ありえない。

俺は認めない！」

板垣「いや、認めるとか認めないとかの問題じゃなくてさ……」

僚太「だってアドルフは絵を描いた！ 俺も描いた！ 存在しなかったはずのものが生ま

れたんだよ！ それって意味ないか？！ いや、ある！」

朝利「自己完結すんなよ」

僚太「電波2本分、俺たちは歴史を変えてる。この二本で、ほんのちよっただけ歴史が変わって、何人かは命が助かってるかもしれない。もしそうだとしたら全然意味なくな
い！」

朝利「僚太、気持ちはわかるけどさあ……」

僚太「残り一〇日で、電波1本まで持ってこう！」

板垣「はあ？」

僚太「圏外ギリまで責める!!」

朝利「いやいやいやいや」

板垣「責めちゃダメだ！」

僚太「だって俺もう、この時代の人達と出会っちゃったし、仲良くなっちゃったし！ 自分

分が帰れなくなるからって、どうでもいいですとはなれないだろ?! だから、残り一

〇日で、俺たちがギリ元の世界に帰れて、かつ限りなくアドルフが画家になる状態にま

でもっていく。そうすれば、俺たちが帰る世界では歴史が変えられなくても、いま、こ

こから先の未来は変えられるかもしれない！ やれるだけのことはやって、あとは、未

来に託す！」

朝利「いや、お前、卒制はどうすんだよ」

僚太「んなもん、どうでもええわ！」

板垣「教授みたいなこと言ってるよ」

僚太「絵なんて、これからいくらでも描ける！」

朝利「わかった！」

板垣「朝利!？」

朝利「未来にフルコミットしようぜ！」

板垣「だ、だせー！ なんかも未来ってワードが出た途端、スゲーださくなった！」

僚太「アグリー！」

板垣「え、え〜」

朝利「板垣もジョインしようぜ！」

板垣「なんだろう、あんなにかっこいいと思っていたのに……」

すごく待ち構えている僚太と朝利。

板垣「はあ……。ほんとにぎりぎりだよ？ ぎりぎりまでしか責めないからね？」

僚太「わかってるって！」

板垣「まあいっか！ 学生最後の夏だし！」

僚太・朝利「アグリー！」

板垣「アグリー！」

映像「残り9日」

エルマーが千鳥足でやってくる。

僚太達、警備員のようにエルマーの行く手を阻む。

エルマー「な、なんだよ」

朝利「はいこつから先に行くときは我々の許可とってもらっていいですか？」

エルマー「な、え？　ここ俺んち！」

板垣「そちら進路確認おねがいします」

僚太「はい、こちら目標目視できません。進路オールクリア」

朝利「通っていいぞ」

エルマー「ふざけんなよ！」

と、鍵盤を叩く音。

アドルフ「ふざけるな！！！」

僚太「目標、来ます！」

朝利「(エルマーに) 止まれ！」

アドルフとアウグストが2階から飛び出てくる。

アドルフ「召集令状だって?!　グストル！　何で俺に隠してた！」

アウグスト「隠してたんじゃないよ！　君に言うタイミングを見計らってただけで」

アドルフ「そういうのを隠してたって言うんだよ！」

板垣「あちゃー……」

僚太「どうした？」

アドルフ「ここ最近何やらこそこそ荷造りしてると思ったらこれだ！（礼状を持っている）」

アウグスト「隠してた礼状が見つかったって」

アドルフ「やっぱり隠してたんじゃないか！」

アウグスト「そうだけどそうじゃなくて。ちゃんと話そうと思ってたんだよ」

アドルフ「いや、君は俺に黙って行くつもりだったんだ。話せば俺に反対されるとわかってたから」

アウグスト「だって反対するだろ？」

アドルフ「当たり前だ！」

アウグスト「ほらあ」

アドルフ「わかってるか？ 召集に応じると言うことは、オーストリア・ハンガリー帝国に身を捧げると言うことだぞ？ この腐敗して落ちぶれた継ぎ接ぎだらけの帝国に友人の身が捧げられると聞いて、どうして反対せずにいられるか！」

エルマー「その通りだ！」

板垣「余計なことを言うな！」

朝利「早く行け」

僚太「早く！」

エルマー「なんだよもう……」

エルマー「追い出されるようにして玄関から出て行く。」

アロン、画材を持って出て来て様子をうかがっている。

アウグスト「しよがないだろ？ 国民の義務なんだから」

アドルフ「だから、その国民という概念をそう簡単に受け入れるなど言ってるんだ」

アウグスト「でも、国民は国民だろ？」

アドルフ「そんな契約は無効にできる」

アドルフ、礼状を破こうとするので、アウグスト慌てて奪い取って、

アウグスト「なにするんだよドルフィ！」

アドルフ「グストル、亡命するんだ」

アウグスト「亡命?!」

アドルフ「今からパッサウにいき密かに国境を抜けドイツ帝国領内でドイツ陸軍に志願するんだ。俺もすぐにあとを追う」

僚太「おい！ 受験はどうすんだ！」

アドルフ「そんなものは後回しだ！」

僚太・朝利・板垣「ダメだ！」

アドルフ「ハプスブルク帝国には一兵たりともやるものか！」

アウグスト「兵役逃れなんかしたら、僕、二度とリンツに帰れなくなっちゃう。お父さんやお母さんに会えなくなるんだ。それでもいいの？」

アドルフ「それが誇り高きドイツ民族としての正しい行いだ」

アウグスト「いい加減にしてよドルフィ！」

朝利「グ、グストル？」

アウグスト「そんなんだから君はいつまでもお守りされてるなんて言われるんだ……」

アドルフ「お守りだと？」

アウグスト「君の夢の話聞くのは楽しいよ？ でもそれは夢だとわかってるから楽しいんだ。リンツの改造計画のことも、二人で暮らす屋敷のことも、本当に素晴らしい夢だと思う。でもね、それは現実じゃない。僕は音楽学校を卒業したら、きっと演奏のため

に国中を方々飛び回ることになる。君はそれに全部ついてくる気かい？ 僕らがお嫁さんをもらったら？ 4人で暮らすの？ 本当にそんなことができると思う？」

アドルフ「大きな屋敷なら」

アウグスト「無理だよ。僕はいやだ」

アドルフ「……」

板垣「うわぁ……」

アウグスト「僕らもう、大人にならなきゃ」

アウグスト、部屋に戻る。

僚太「アドルフ、絵を描こう……」

アドルフ、黙って絵を描き始める。

僚太「電波は？」

板垣「4本」

僚太「増えてる……」

映像「あと6日」

絵を描いているアドルフとアロン。

マリアがやってきて、アドルフにチラシを渡す。

マリア「はいこれあんたに」

アドルフ「……（読んでいる）」

僚太「なんだ？」

マリア「エルマーが渡してくれて。デモのお誘いだとかなんとか」

僚太慌ててチラシを奪い取る。

アドルフ「なんだよ！」

僚太「今は絵のことに集中しよう。リンツのシュテファニーは待つてはくれないぞ」

アドルフ「……ああ」

アドルフ、無然と筆を進める。

朝利「油断も隙もないな……」

僚太「電波は？」

板垣「3本に減ってる！」

僚太「やっぱり、絵を描かせるべきなんだ」

映像「あと5日」

荷造りをしたアウグスト、二階から降りてくる。

アウグスト「じゃあ、いってくるね。ドルフィ」

アドルフ「……」

僚太「アドルフ、挨拶は」

アウグスト「兵役っていったって、戦場に行くわけじゃない。ちょっと訓練して、一月頃には戻ってくるよ」

アウグスト「手紙書くよ。君も書いてね」

アドルフ「……」

板垣「なんとか言えよ、アドルフ」

アドルフ「……」

板垣「もう会えないかもしれないんだぞ?!」

アドルフ「は?」

朝利「おい板垣」

板垣「あ、ごめ」

アドルフ「……」

アウグスト「(出ていこうとする)」

僚太「グストル! やっぱり後もう少しだけウィーンにいられないか? せめて一八日まで……」

アウグスト「ごめんね。点呼の日程が決まってて、もう行かなきゃいけないんだ。じゃあ」

アウグスト、出ていく。

僚太「何本?」

板垣「2本……? また減ってる?」

僚太「これでいいってことか……?」

映像「あと3日」

顔面に怪我をしたエルマーが玄関から転がり込んでくる。

シユテファニー「おじさん?!」

マリア「エルマー! あんたなに?! どうしたの!!」

エルマー「ユダヤ人にやられたんだ……」

シユテファニー「どうせまた大声で悪口言いふらしてたんでしょ! 殴られて当然よ!」

マリア「なんてこと言うんだい！ ああ、なんて可哀想に……。本当に乱暴な人が多いんだねえ……」

アロン「……」

マリア（アロンに）この人がなにをしたって言うの。ええ？ 自分の仕事を取り戻そうとしてるだけじゃないか」

シュテファニー「お母さん！ アロンはなにもしないわ?!」

マリア「だってこの人達は、裏でみんな繋がってて、計画的に悪いことをしてるって」

シュテファニー「そんなの噂話でしょ？」

エルマー「いいや姉さん、その通りだよ。わかってないのはお前だよ！ すっかりそのユダヤ人に洗脳されやがって……」

シュテファニー「何言ってるの？」

マリア「クラウドさん。悪いけど近々出てってくれる」

シュテファニー「ええ？」

マリア「あんたが来てから、この人、酒は増えるし乱暴になったし……きつと悪い影響を受けてるんだわ。この調子じゃきつと傷の治りも悪くなる。すいませんけどね」

アロン「そう言うことならしょうがないですね……」

シュテファニー「そんな」

アロン「すみませんが、新しい下宿を見つけるのに2、3日だけ頂けますか」

マリア「ええ、まあ、そのくらいでしたら」

アロン「じゃあ早速探しに行かないと」

マリア、エルマーを連れてはける。

シュテファニー「アロン、本当にごめんなさい。絶対、絶対、貴方たちが安心して暮らせる時代がきつと来るから！ 私、頑張るから！」

アロン「ありがとう。シュテフィー」

アロン、シュテファニー去る。

僚太達、携帯のぞき込み、

板垣「一本……」

映像「あと1日」

アドルフ「外が騒がしいな……」

板垣「明日は皇帝誕生日だからね。観光客やデモの人達で街が賑わってるんだよ」

アドルフ「世界がうねりの中で悲鳴を上げているようだ」

僚太「アドルフ、大丈夫だから、お前は今は絵を描くことだけ考えろ」

アドルフ「この混乱の世の中で、絵を描くことだけを考える……？ そんなこと許されるのか？」

板垣「許されるとか、許されないとかそういうのはないから！」

僚太「お前がお前を許せばいいんだよそういうのは！」

アドルフ「俺は、許せない」

僚太「シユテフアニーが待ってる！ 待ち合わせ場所の連絡、来たんだろ？」

アドルフ「……約束は守る」

アドルフ自室へ。

板垣「なんか、ものすごい勢いでアドルフが孤立していつてるんだけど……」

朝利「もしかしてこれが歴史の必然性ってやつか……？」

僚太「だけど、携帯の電波は減ってる。アドルフは画家に近づいてるってことだよな？」

板垣「たぶん……。でもなんか、変だよな？」

朝利「残り時間は少ないぞ」

僚太「……あと、俺たちになにができる？」

暗転。

映像「一九〇八年八月一八日」
荷造りをしたアロンが出てくる。

僚太「アロン」

板垣「下宿、いいところ見つかった？」

アロン「こと似たり寄ったりですけどね。本当に見送らなくていいんですか？」

板垣「大丈夫大丈夫」

朝利「見送られると逆にちょっと不味いんだ」

アロン「そうですか」

板垣「シュテファニーは？」

アロン「さあ……」

板垣「シュテファニーがアロンを見送らないなんて……」

アドルフ、画材を持って自室から現れる。

僚太「おお、アドルフ」

朝利「イイ感じじゃん」

板垣「身だしなみはバッチリだね」

アドルフ「そうか……」

僚太「ほんとうについてかなくていいんだな?!」

アドルフ「やめる。子どもじゃないんだ」

アロン「アドルフ。これ、安物ですけど。選別です。リンツのシュテファニーへのお土産に」

アロン、簡素な花束を渡す。

アドルフ「もし俺がドイツ人でなく、君がユダヤ人でなく、画家を目指していなかったら、もう少しいい関係が気付いていたかもしれないな」

アロン「道のりは遠いですね……」

アドルフ「彼女に渡すよ。ありがとう。(僚太たちに)お前らも」

僚太「アドルフ、落ちついて行けよ」

朝利「笑顔、忘れるなよ!」

板垣「急に大声出したりしちゃダメだよ？」

僚太「うまく描けなくても癩癩起こすなよ」

朝利「深呼吸して!」

板垣「家上がる前に靴の汚れをチェックして！」
アドルフ「わかった。うるさい」
僚太「気をつけてな」
アドルフ「ん」

アドルフ、出ていく。

アロン「じゃあ僕も」

マリア「あら、もうヒトラーさんいっちゃったのね」

板垣「あ、なんかようでしたか。今出ていったところなので追いかければ」

マリア「いや、いいのよ。たいした用事でもない。シュテファニーの部屋にね、クビツェクさん宛の手紙が紛れ込んでたから。ヒトラーさん預けようと思って」

僚太「グストル宛の手紙……？」

マリア「なんか女の子からよ。シュテファニーと同じ名前の。まあ随分高そうな封筒だから、うちのとは似ても似つかないんでしょうけど」

僚太「え……」

マリア「まあ、帰ってきたら渡すわ」

僚太「待って下さい！ その手紙、俺が預かりますよ。すぐにアドルフを追いかけていて渡します」

マリア「あらそお？ じゃあよろしく頼むわね」

マリア、手紙を渡して去る。

僚太「封が開いてる」

板垣「え、どういうこと？」

僚太「(手紙を見るが) そうだ、読めないんだった」

朝利「アロン頼む」

アロン「い、いいんですか？」

僚太「いいから早く！」

アロン「アウグスト・クビツェク様。兄から、あなたの友人が私の肖像画を描いて下さると聞きました。とても嬉しいお申し出なのでですけど、もうすでに肖像画を描いて戴く絵描きさんは決まっております」

僚太「断られてる……」

板垣「え、じゃああの手紙は……」

朝利「偽物……？ シュテファニーがニセの手紙を書いておれたちに渡してたのか?!」

僚太「じゃアリンツのシュテファニーは……」

板垣「来ない。……これも歴史の必然性なのかな？」

アロン「歴史の必然性？」

朝利「いま電波何本？」

僚太「(アロン) ちょっと今こっち見ないでね」

板垣「あれ……？ 電波が……」

朝利「どうせ4本に逆戻りだろ？」

板垣「1本もたつてない……！」

僚太「は……？」

板垣「ぎ、ぎりぎりを責めてる……！ これ、圏外になっちゃうんじゃないの?!」

アロン「圏外？」

僚太「え、てことは、アドルフは画家になるってこと……？」

朝利「いや……シユテファニーはアドルフを殺すつもりじゃないか……？」

アロン「え……」

と、買い物姿のシユテファニーが上手からやってくる。

シユテファニー「あ、まだいたのね。ごめんなさい。お見送りしたいんだけど、今日はちよつと用事が」

僚太「シユテファニー、その籠の中身を見せて」

シユテファニー「え？ なんで？」

僚太「いいから」

シユテファニー「いや」

僚太「見せろ！」

僚太とシユテファニー、少し揉み合う。

シユテファニーが籠を落とす、中からナイフが転げ出る。

シユテファニーそれを慌てて拾い僚太達へ向ける。

シユテファニー「止めても無駄だから！」

アロン「シユテファニー、どうして」

シユテファニー「これしか方法がないの！ アロン、うまく説明出来ないけど……アドルフは恐ろしい人間なの！ 大人になったら、ユダヤ人をたくさん殺すのよ。信じられないくらいいたくさん！ 今殺さなきゃ大変なことになっちゃう!!」

アロン「なにいつてるんですか」

シユテファニー「アロン本当なの信じて！」

僚太「シユテファニー、それは俺たちがいた世界の話で、いま、ここではまだどうなるかわからないんだって！」

シユテファニー「そうなるに決まってる。母さんも、おじさんも、街の人達もみんなユダヤ人を嫌ってる！ 今はそう思っていない人だって、どうなっちゃうかわからないじゃな

い！ そしたらもう、誰もアドルフを止められない！ 今やらなきゃ……アロンだって殺されちゃう！！ お願ひ行かせて！」

アロン「シュテファニー、君はきつと悪い夢を見たんですよ」
シュテファニー「夢じゃない……夢じゃないの……」

板垣「アドルフはまだなにもしてない！ 今アドルフを殺したら君が殺人犯になっちゃうんだよ！」

朝利「他に方法があるから！」

僚太「そうだよ！ アドルフが画家になればさ」

シュテファニー「無理よ」

僚太「わからないって！」

板垣「選挙だつてあるし！ アドルフを選ばなきゃ良いんだよ！」

朝利「そうそうそれぞれ！」

シュテファニー「私は、選挙には行けないし、政治家にだってなれない。これしか方法がないの！」

アロン、シュテファニーの方へ近づいていく。

板垣「アロン！」

シュテファニー「やめてアロン」

アロン「君にアドルフを殺して欲しくない」

シュテファニー「今行かなかったら私きつと後悔する」

アロン「いつてもきつと後悔する」

シュテファニー「あなたのためなの。わかつて！」

アロン「なら、僕の側から離れないで」

シュテファニー「……」

アロン、シュテファニーからナイフをとりあげると床に投げる、

シュテファニー、ガックリと座り込んでしまう。

アロン、そんなシュテファニーを優しく支えてやる。

アロン「君の話が本当だとしても、みんなの命と引き換えに、君が罪人になる必要はないんです」

僚太「アドルフは？！」

シュテファニー「レンガ工場の裏。待ちぼうけよ……。ざまあみろ……」

僚太「今電波は？」

板垣「4本……」

僚太「いこう！ 今あいつを1人にしちゃダメだ！」

板垣「でも、もう時間が！」

僚太「ぎりぎりまで責める！！ アロン！ シュテファニーを頼む！」
アロン「はい」

僚太、朝利、板垣去る。

アロン「大丈夫、きっと悪い夢ですよ……」

プラカード（に見立てた額縁）を持った群衆が一斉に出てきて、そこはデモ隊で
ごった返すリンツ通りになる。

人ごみの中アドルフを探す4人。

僚太「アドルフー！」

板垣「アドルフー！」

朝利「クソ、なんだよこの人ごみは」

板垣「ユダヤ人排斥デモだ。皇帝の生誕パレードにぶつけてるんだ！」

エルマーとワシリーが2階から人々を先導している。

ワシリー「ユダヤ人は出ていけー！」

エルマー「俺たちはユダヤ人の特権を許さないぞ！」

群衆もそれに呼応するように怒号をあげる。

ワシリー「我々はこのまま王宮まで向かう！！　すすめえ！！」

僚太「アドルフー！」

僚太達、もみくちゃになって、人ごみに流されていく。

一人ポツンとベンチに座っているアドルフ。

花束を投げ捨て踏みつける。

僚太達、駆けつける。

僚太「アドルフ！」

アドルフ「なんだお前たち、帰ったんじゃないの……」

僚太「シュテファニーから伝言があつて……今日は来れなくなったって」

アドルフ「わかつてる。くだらないデモのせいだ……」

朝利「僚太、時間が」

アドルフ「いや、そもそも俺が彼女を描こうだなんて、そもそもが馬鹿みたいな話だったんだ。人には分つてもんがある。そこからはみ出ようとすれば痛い目を見て当然だ」

僚太「アドルフ。多分また、チャンスがあるよ」

アドルフ「……さっさと行け」

板垣「僚太、もう電池無くなりそう!!」

僚太「電波は？」

板垣「4本……」

朝利「僚太、もう行かないと！」

朝利、僚太を引っ張っていこうとするが、

僚太「アドルフ！」

アドルフ「ん」

僚太「ごめん、やっぱりもう、チャンスはないかもしれない」

アドルフ「は？」

僚太「ないかもしれないけど、それでも、絵を描くのをやめないで欲しい。お前がなににならとかならないとか、そういうのはもう、あんま関係なくて、お前がこれからどんな人生を歩んだとしても、自分の描く絵を、好きでいて欲しい」

板垣「ほんとにもうやばいよ！」

僚太「それだけでいいから。自分の気持ちを、他人のためにあげ渡しちゃダメだ」

アドルフ「なにいつてんだ」

朝利「僚太、もう行こう！」

僚太「これお前にやる！」

僚太、アドルフにスケッチブックを渡す。

板垣「え?! いいの?!」

僚太「まだたくさん描ける! たくさん描けよ! アドルフ!」

朝利「いこう!」

僚太、板垣と朝利に引きずられるようにして去る。

取り残される、アドルフ。

しばしあって、スケッチブックを投げ捨てる。

アドルフの背後、中央奥から、ワシリーとエルマーが待ち構えている。

アドルフ、ワシリー達のほうへ一歩踏み出す。

遠くから、僚太の「アドルフ!」と叫ぶ声が聞こえる。

アドルフ、ハッと、スケッチブックを振り返る。

暗転。

明転すると、そこはギャラリー。

チルな雰囲気照明の照明でパーティー仕様になっている。

踊り場で東吾と富貴子がスピーチをしている。

東吾「え、本日は斎藤ギャラリー六本木のオープニングレセプションに足をお運び戴き、

ありがとうございます」

富貴子「そうですね」

東吾「これからも斎藤ギャラリーは、日本芸術界の発展に寄与すべく、全力を挙げて参る所存です」

富貴子「そうですね」

バタバタと走り込んでくる藍島、僚太、朝利、板垣。

藍島「うおー！間に合ったあー！！」

東吾「(咳払い)」

藍島「失礼しましたー……」

東吾「えー今日は、新しいギャラリーのお披露目と、あともう一つ、皆様にお披露目したものがございます。僚太」

僚太、踊り場に登る。

富貴子「ちょっとなあに、そのかつこ。スーツで来なさいっていったでしょう」

東吾「えーこちらの汚いのは、私の倅でしてね。こんな形ですが、私譲りでなかなか見る目がある」

富貴子「そうなのよ」

タイムマシンを抱えた鷲塚、鼻歌を歌いながら2階へ行く。(同空間にアトリエとギャラリーが存在している)

東吾「ゆくゆくは、斎藤ギャラリーグループを継がせたいと思っております」

僚太「あのー、あのー、ちょっといいですか。今日は、ここにいらっしゃる、アートファンの皆様に、自分を売り込みに来ました。俺は、画家です。今はまだ、なんの実績もないですが、世界中の誰もが知るような画家になります。だから、俺の作品を買うなら、今のうちです。後から欲しくなっても、その頃には皆さんでは手が出なくなってるかも」

東吾「おい、なにを言ってるんだ」

僚太「この人のいうとおり、俺、見る目は確かなんて。ギャラリー継ぐより、画家になるほうが将来安泰だってわかつちやったんすよね！なので、今後ともよろしく。以上！」

2階でボンと煙が上がり鷲塚の姿が消える。

僚太、さっさと踊り場を降りる。

東吾、ムツとして去る。

富貴子「まあ、大変失礼いたしました。では仕切り直しまして、企画展の概要をご説明させていただきます。テーマは歴史。歴史をテーマにした作品を展示しております……」

僚太、朝利と板垣の元に駆け寄る。

僚太「あー早く帰って酒飲んで寝たい」

朝利「わかる」

板垣「俺ラーメン食べたいんだけど」

僚太「おれ山菜そばがいい」

朝利「お。ジョインする？」

板垣「アグリー」

富貴子「……中でも注目戴きたいのは、ナチスがユダヤ人から強奪した美術品のうち、今年に入って新たに発見された作品です。作者はアロン・クラウス。タイトルは『本を読む女』」

壁には輝く長方形が映し出されている。

僚太達、一枚の絵画の前で足を止める。

ジツと見つめ続ける。

暗転。

○ 22・ エピローグ、煉瓦工場裏

ワシリーのほうへ一歩進むアドルフ。

アウグスト「ドルフィ！」

アドルフ、振り返る。

アウグストが大慌てでアドルフに駆け寄ってくる。

アドルフ「は？　なんで君……」

アウグスト「僚太から兵舎に電報があったんだよ！　アドルフ、キトクって。だから急いで戻ってきたんだけど……。元気そうじゃないか……」

アドルフ「なんだそれ」

アウグスト「なんだはこっちのセリフだよ。あれ？　シュテファニーは？」

アドルフ「腹が立ちすぎて君に話す気も起きないよ」

アウグスト「なにそれ。なにがあったんだよ。ねえ、ドルフィ！」

アドルフ、スケッチブックをヒョイと拾うと、アウグストとともに歩き去る。

ワシリーと、エルマー、静かにその場を去る。

おわり。

【参考文献】

- A・クビツェク著、船戸満之／宗宮好和／桜井より子／宍戸節太郎訳（2004）『アドルフ・ヒトラー―我が青春の友』MK出版社
- 米国ホロコースト記念博物館『ホロコースト百科事典』
<https://encyclopedia.ushmm.org/ja>
- 村山雅人著（1995）『反ユダヤ主義 世紀末ウィーンの政治と文化』講談社選書メチエ
- 三谷研爾編（2007）『ドイツ文化史への招待 芸術と社会の間』大阪大学出版会
- 芝健介著（2021）『ヒトラー』岩波新書
- マイケル・ケリガン著、白州清美訳（2017）『写真でたどるアドルフ・ヒトラー』原書房
- 大澤武男著（2009）『青年ヒトラー』平凡社新書
- 藤村俊一著（2005）『ヒトラーの青年時代』刀水書房
- 中島義道著（2012）『ヒトラーのウィーン』PPS通信社
- 前田良三著（2021）『ナチス絵画の謎 逆襲するアカデミズムと『大ドイツ美術展』』みすず書房
- 古川真宏著（2021）『芸術家と医師たちの世紀末ウィーン 美術と精神医学の交差』みすず書房
- 水沢勉編（1999）『エゴン・シーレ ウィーン世紀末を駆け抜けた鬼才』六耀社
- 三成美保／小浜正子／姫岡とし子編（2014）『歴史を読み替えるジェンダーから見た世界史』大月書店
- 山口つばさ著（2017）『ブルーピリオド』講談社
- 松崎犬輔著（2012）『君とガッターメラーター！』集英社
- 《参考》
- 歴史を楽しく学ぶコテンラジオ（2019）『COTEN RADIO #39～46 ヒトラー編』
<https://youtu.be/q75j1z8T8y4?si=sfREWYwUMdEmGZ4m>